多摩川支流、野川流域における湧水と遺跡

高　村　弘　毅*・池　上　　悟**

はじめに
Ⅰ．武蔵野台地と湧水の形成
　1．武蔵野台地の形成と湧水
　2．野川の形成
Ⅱ．野川流域における湧水と水質
　1．湧水の調査・分布
　2．湧水の湧出量と水質
　3．湧水と遺跡の位置の関係
Ⅲ．野川流域における遺跡立地の概要
　1．旧石器時代
　　1）旧石器時代の遺跡分布
　　2）主要遺跡概観
　　3）旧石器時代の磨製石斧
　　4）遺跡の変遷
　2．縄文時代
　　1）縄文時代の時期区分
　　2）遺跡の分布
　　3）集団の領域
　　4）水場遺構
　3．弥生・古墳時代
　　1）弥生・古墳時代遺跡の分布
　　2）高塚古墳の分布
　　3）横穴墓の分布
　4．歴史時代
　　1）水辺の祭祀
　　2）野川流域における井戸
　　3）野川流域における神社
Ⅳ．野川の湧水と流域における遺跡
おわりに

はじめに

人間の生活基盤は古代より利水環境に制御されてきた。基本的には水のあるところには生態系が維持されるという法則性が成り立つならば、水と同様生活の重要な基盤要素である採食環境は居住地選択の従属条件になるにすぎないともいえる。このような原則は、火山、扇状地、砂漠などの乏水地域ほど顕著であることは先学者や筆者らの調査で明らかである（矢嶋　昭和29年）(1)。

しかし、このような法則が湿潤地域にある武蔵野扇状地などのようなところでも成り立つものか、それとも水辺への依存度が希釈される状態で現われるものなのかなどについての記載は多くない。そこで、本研究は、野川流域に集落遺跡、横穴墓など多くの人間生活の痕跡を示す遺跡が分布することに着目し、湧水・水辺などと古代の生活空間との関係を明らかにしようとするものである。しかし、両者の相関性に関しては時間の関係で充分解析していないこともあり、ここでは事実の記載にとどめることにつとめた。

Ⅰ．武蔵野台地と湧水の形成

1．武蔵野台地の形成と湧水

武蔵野台地は、北側が荒川低地、南側は多摩川低地、東側は湾岸低地など三方を沖積低地に囲まれてできあがった洪積台地である(2)。洪積時代

*　地球環境科学部環境システム学科（文学部地理学科兼担）
**　文学部史学科

に多摩川が運んだ砂礫によってつくられた青梅市付近を扇頂とする扇状地に、箱根山、富士山など周辺の火山からの噴出物（火山灰・軽石など）が何度かにわたって覆い被さってできあがった台地で、その面積は500㎢もある。台地は、その後周辺の河川、湧水、多摩川自身により侵食され、開析台地の地形となった。これらの開析作用によってローム層下の扇状地礫層、段丘礫層中の地下水が旧多摩川の河床部の谷頭（約70mの等高線付近）、谷壁、谷底（約50m付近）などで地表に露出し、あるいは滲出して小河川の主な涵養源となり、人々にとって水資源として依存度の高い恒常流河川を形成してきた。このようにして形成されたのが三宝寺池、善福寺池、井の頭池、深大寺池、真姿の池、神明の森「みつ池」、大蔵、等々力など、武蔵野台地の多くの湧水である。これらの湧水は、湧出している地点の地形形態から三宝寺池、善福寺池、井の頭池、石神井池などの谷頭湧水と、真姿の池、貫井弁天、殿ケ谷戸、みつ池、大蔵などの崖線湧水とに分けられる(3)。野川の左岸に分布する60数ケ所（図1）の湧水群は、地下水を含む礫層がハケと呼ばれる、いわゆる段丘崖（高さ、10～20m）によって切断されているために國分寺崖線沿いに浅層地下水が湧出してできた崖線湧水である(4)。これらの湧水は、崖線部より少し背後に後退した位置に馬蹄形をした特殊な谷頭崖地形に抱かれるような形で存在するのが特徴である。この馬蹄形の地形は、湧水活動により湧水を中心に崖下が不安定となり崩壊を繰り返したために形成されたものと考えられる。

2．野川の形成

多摩川の支流野川は、武蔵野國分寺跡北側の“真姿の池”や“日立中央研究所内の湧水”など、恋が窪、元町用水などの上流付近に分布する湧水群に源を発し、途中國分寺崖線沿いの湧出水を集めて約22km下流の二子玉川・兵庫島で多摩川に注ぐ流域面積約70㎢の都市河川である。流域内に湧水を涵養源とする仙川（全長約11km、面積約20㎢)、入間川などの小支流がある(4)。

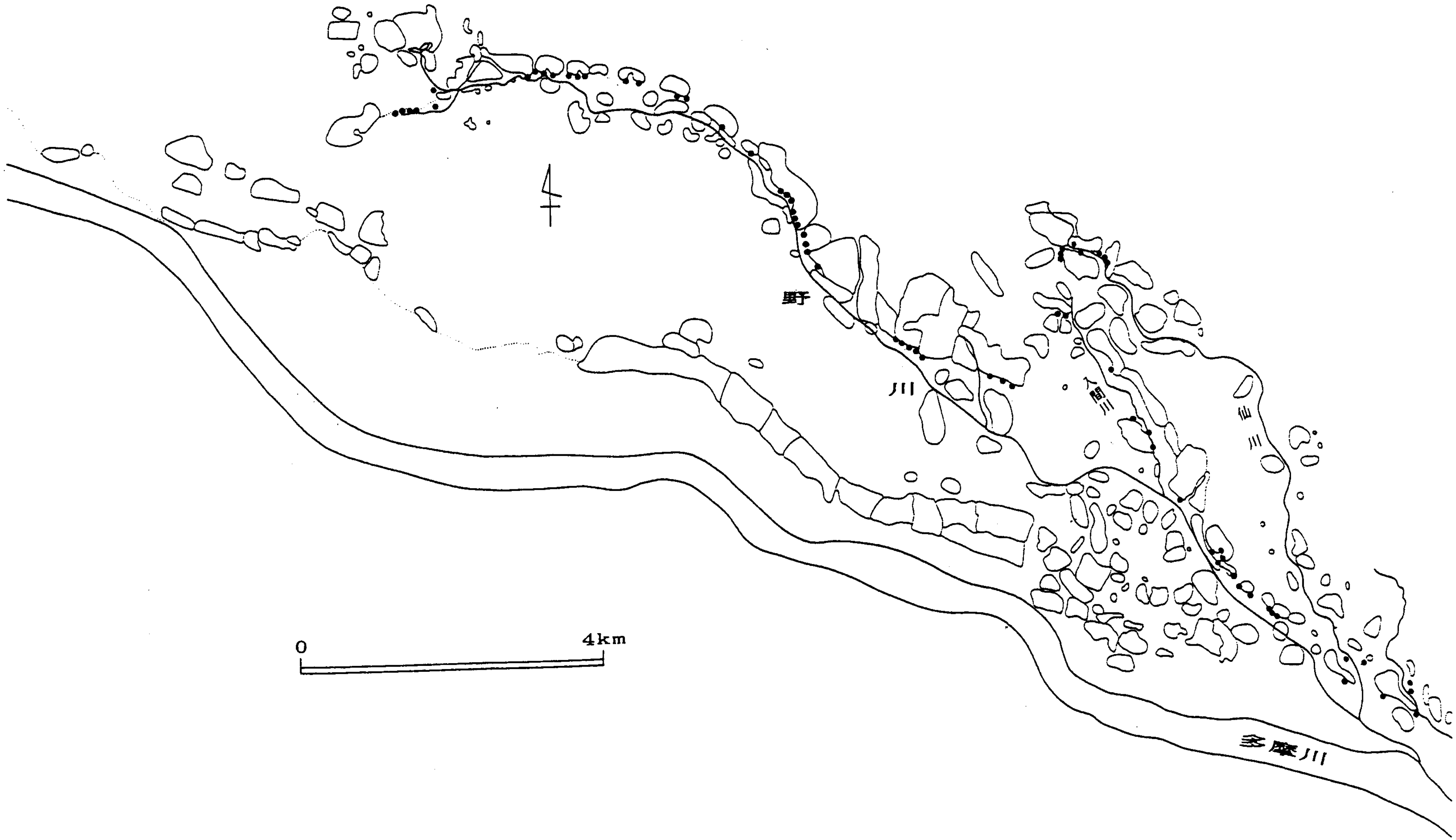
野川周辺で最も高い地形は、浅間山（79.5m）で、これは多摩面に相当する残丘である。これより低い地形面は台地および段丘面と低地である。台地の中の上位面に属するのは下末吉面で、次いで武蔵野面、立川面とつづく。下末吉面と武蔵野面とは、武蔵野台地を構成する地形面である。武蔵野面と立川面との間に、前述の國分寺崖線が分布しているが、野川の下流域では立川段丘面が消失しているため両段丘の段丘崖が合流して段差が大きくなっている。一方、低地は、多くの扇端湧水によって開析されてできた放射状の河谷底と、多摩川に沿う旧河道および氾濫原の2種類からなっている。

地質は、丘陵や台地は上部に関東ローム層を乗せているが、低地には浸蝕されて存在しない。多摩面のローム層は、下位より多摩ローム、下末吉ローム、武蔵野ローム、立川ロームが存在するが、下末吉面では多摩ロームを、武蔵野面では多摩ロームと下末吉ロームを、立川面では立川ローム以外をそれぞれ欠落する(4)。これらのローム層の下位には、砂礫層や粘土層・シルト層が堆積している。國分寺崖線の段丘を構成する武蔵野面のローム層の下部に武蔵野礫層があり、その下位には粘土とシルトからなる東京層が堆積している。そのため、ローム層に浸透した降水は武蔵野礫層中に貯留され、段丘崖で切断された礫層から湧出してハケ沿いに多くの湧水を形成した（図1　野川の湧水と遺跡の分布)。

Ⅱ．野川流域における湧水と水質

1．湧水の調査・分布

前述のような原因で形成され湧水や多摩川からの伏流水等により涵養されて野川が形成され、冬



第1図　野川流域の湧水と遺跡の分布

季でも安定した流量が維持されてきた。そのため、古代より近年に至るまで野川沿い、崖線沿いが人々の居住の場として利用されてきたこたことが各種の遺跡の分布や土地利用などから推定できる。しかし、これらの湧水は、時代とともに枯渇するもの、湧出量が減少するものなどが多くなり、生態系や人々の生活環境が大きく変化した。湧水の湧出量の変化は、降水による涵養量の変化、家屋、道路などによる非透水性物質による被覆率の増加、地下水取水量の増加などの影響で発生することが多い(5)(6)(7)。そこで湧水の分布と諸遺跡の分布の相関性について考証すると同時に、最近の湧水、水辺環境（湧出量、水質）について検討することとした。調査は、可能なかぎり1983年６月26日に実施した湧水について比較することを基本として、先ず1996年８月22、23日に64地点の湧水のうち37地点（図２．国分寺崖線沿いの湧水調査地点）について詳査した。その結果は、表１に示すとおりである。本表により1983年と1996年の湧出量の比較をしたのが図３（國分寺崖線沿いの湧水湧出量）である。

また、水質については、pH、EC（電気伝導度)、水温については1983年、1996年とも調査しているが、水質重要項目については1983年は調査していないので比較できないことから1996年についてのみ図４（湧水の水質ヘキサダイヤグラム）で検討し、世田谷区重点湧水７地点について1990年11月と1996年８月の分析結果により解析、検討する。

２．湧水の湧出量と水質

野川流域における湧水量は、地下水位の低下により全体として枯渇ないしは減少の傾向にある。図３により、1983年と1996年を比べると、合計で前者が66.33ℓ／sec（5730.9㎥／day)、後者が37.66ℓ／sec（3253.8㎥／day）となり、季節的変動を考慮に入れたとしても減少の傾向にあることが明らかである。これらの湧出水は野川の重要な涵養源（１湧水当たりの平均涵養量：2.01ℓ／sec～1.14ℓ／sec）であることには変わりないことから、湧水の涵養の促進策として個人宅に雨水浸透マスの設置を全流域単位で進めている。特に、野川上流域の国分寺市、小金井市（No.１～No.19）では雨水浸透マスの設置が充実してきている(6)にもかかわらず減少し、下流域（世田谷区、No.20～No.39）では増加の傾向を示したことに注目したい。野川流域における湧水の湧出量は、前者が６月、後者は８月という事情から降水量の要素が原因しているようにも考えられるが、８月までの累積降雨量（何れも世田谷区成城の観測点の資料）をみると、前者が926.0㎜、後者は850.0㎜で、寧ろ後者が76㎜少ないことになる。このことから、下流域では上流域と降水に大きな違いがないものとすれば(7)、雨水浸透マスによる涵養効果が少しつづ現れつつあることになる。

上流域で下流域の湧水におけるように湧出量が浸透マス設置後(8)も増えていない理由は、土地の再開発などにより、非透水物質に覆われる面積が拡大し(9)、雨水の地表面からの浸透が減少したため(4)(11)、浸透マス効果が稀釈されたためではないかと考える。

一般水質については、1996年の水質の分布状態をヘキサダイヤグラムにより上流より順次図４に示す。本図によると、野川流域の湧水は汚染物質を除き、殆どが類似した水質パターンであり、湧水ごとの相違点は見られないが、敢えて指摘するならば、塩化マグネシウムと硫酸が他の成分より多めに現れていることである。また、このことは、各湧水における涵養源は、降水など同じである証ともいえよう。

つぎに、トリリニアダイヤグラムにより、1990年11月（野川下流域、世田谷区内）を図５に、1996年８月（上流から世田谷区内まで）を図６に示す。1990年では全体として$Cl\text{-}SO_4$型で、1996年には下流ほどその含有量が増加することが明ら

表１－１　国分寺崖線湧水水質分析結果

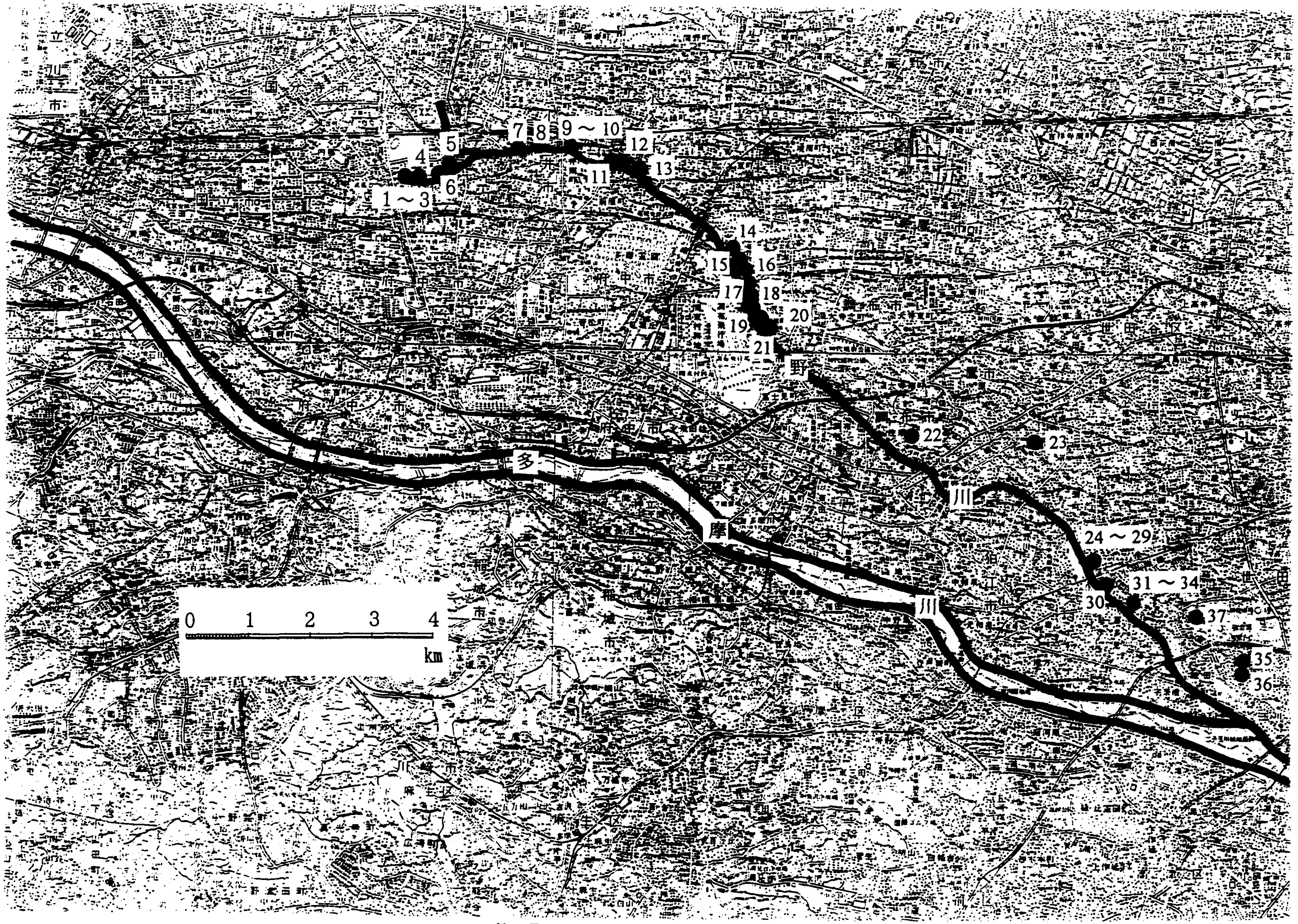
No.	調査地点	標高 m	観測日	湧出量 l/sec	湧出量 t/day	水温 ℃	EC_{25} μS/cm	pH	RpH	Na^+ mg/l	K^+ mg/l	Ca^{2+} mg/l	Mg^{2+} mg/l	NH_4^+ mg/l	SO_4^{2-} mg/l	Cl^- mg/l	HCO_3^- mg/l	NO_3^- mg/l	NO_2^- mg/l	PO_4^{3-} mg/l	SiO_2 mg/l
1	万葉植物園 榎の根元	64	83/06/26	9.00	778	15.6	217	5.7	7.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/23	1.00	86	16.2	229	6.0	7.6	11.2	0.4	12.9	6.6	0.0	9.6	14.6	50.0	31.8	0.0	0.0	25.1
2	本多宅 竹藪の中	64	83/06/26	3.44	297	15.7	216	5.6	7.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/23	0.83	72	16.2	218	6.1	7.3	10.8	0.4	12.9	6.6	0.0	9.2	12.9	54.2	30.3	0.0	0.0	25.9
3	本多宅 裏	63	83/06/26	0.76	66	15.4	217	6.2	7.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/23	0.00	0	20.9	238	6.2	7.2	11.0	0.7	12.1	6.0	0.3	10.7	20.3	51.7	18.7	0.0	0.0	27.8
4	真姿の池	63	83/06/26	7.98	689	15.7	205	5.9	7.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/04/30	9.21	796	15.6		5.9	7.8	11.5	0.7	13.6	7.7	0.0	8.6	14.0	47.9	31.8	0.0	0.0	24.5
			96/08/23	4.00	346	16.4	223	6.2	7.4	10.2	0.4	12.8	6.6	0.0	10.0	16.9	49.1	32.2	0.0	0.0	26.5
5	井田宅前	63	83/06/26	13.00	1123	16.5	160	6.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/24	1.27	109	16.9	209	6.0	7.4	10.3	0.5	13.6	6.7	0.0	9.0	18.3	48.8	33.7	0.0	0.0	25.1
6	小林理学研究所	62	83/06/26	3.29	284	16.2	203	6.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/24	0.38	32	16.5	216	6.0	7.4	10.2	0.4	14.5	7.7	0.0	8.9	18.0	52.0	33.5	0.0	0.0	23.1
7	東京経済大学新次郎池（下）	59	83/06/26	9.10	779	17.3	439	5.6	6.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/04/30	0.35	30	15.9	219	5.9	7.8	12.9	0.7	11.4	8.7	0.0	11.9	15.2	42.6	49.6	0.0	0.0	20.5
			96/08/23	0.06	5	17.9	211	6.5	7.4	11.8	0.2	13.0	6.5	0.0	19.4	18.9	41.5	39.2	0.0	0.0	20.4
8	貫井神社	60	83/06/26	2.65	229	15.9	246	5.6	6.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/04/30	3.38	292	15.7	225	6.0	7.7	13.0	1.0	18.2	9.1	0.0	12.4	17.9	46.3	55.6	0.0	0.0	19.8
			96/08/23	3.00	259	16.8	233	6.0	7.4	11.8	0.5	15.5	7.3	0.0	20.5	18.1	50.8	38.7	0.0	0.0	21.4
9	滄浪泉園（１）	66	83/06/26	0.69	59	15.8	130	5.4	6.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/23	0.21	18	16.6	187	6.2	7.4	9.0	0.3	11.0	5.9	0.0	13.2	15.4	36.6	27.0	0.0	0.0	22.3
10	滄浪泉園（２）	66	83/06/26	0.07	6	15.9	213	5.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/23	0.04	3	16.8	192	6.2	7.4	10.2	0.4	11.7	6.3	0.0	9.4	17.5	39.8	39.2	0.0	0.0	21.2
11	本田宅 胡桃荘	56	83/06/26	0.15	13	16.8	227	6.4	7.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/23	0.03	3	16.4	281	6.1	7.3	15.2	0.4	16.2	9.1	0.0	18.0	33.5	43.0	52.6	0.0	0.0	22.7
12	谷口文男宅	56	83/06/26	0.47	41	16.4	199	6.0	6.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/24	0.18	15	16.7	245	6.2	7.4	14.5	0.5	13.7	6.7	0.0	17.4	26.5	43.9	49.5	0.0	0.0	22.1
13	中村研一郎美術館	56	83/06/26	0.10	8	16.0	236	6.1	6.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/24	0.01	1	17.8	240	7.0	7.4	12.6	0.5	13.8	7.3	0.0	17.7	21.1	46.9	46.6	0.0	0.0	24.3

表１－２　国分寺崖線湧水水質分析結果

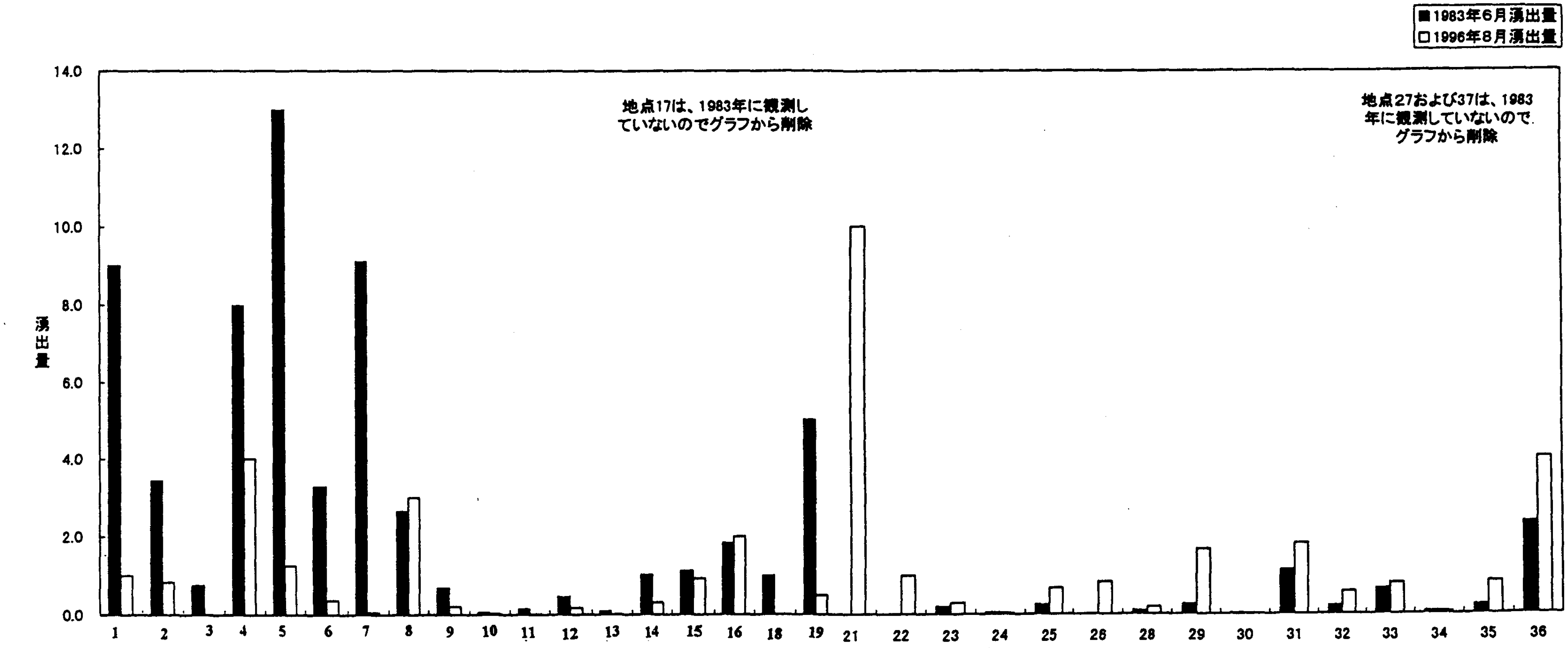
14	ＩＣＵ土管Ａ	45	83/06/26	1.03	89	16.0	221	6.6	7.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/04/30	0.18	15	19.5	165	7.8	7.9	9.5	0.8	12.3	6.6	0.0	7.9	11.9	47.1	25.3	0.0	0.0	21.9
			96/08/23	0.31	27	19.0	179	6.4	7.7	9.8	0.4	10.6	5.4	0.0	12.1	15.2	48.1	18.0	0.0	0.0	23.9
15	ＩＣＵ土管Ｂ	45	83/06/26	1.13	98	16.5	218	6.0	7.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/04/30	0.54	47	17.2	173	6.7	7.8	10.0	0.8	12.2	7.1	0.0	8.6	13.2	47.1	26.8	0.0	0.0	21.7
			96/08/23	0.93	80	17.8	201	6.5	7.7	10.5	0.4	11.9	6.0	0.0	12.9	18.5	49.8	23.3	0.0	0.0	24.3
16	金児宅崖下	42	83/06/26	1.84	159	15.8	211	5.8	7.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/22	2.00	173	16.2	200	6.0	7.2	9.9	0.4	12.3	6.3	0.0	13.2	17.0	46.9	29.3	0.0	0.0	25.4
17	箕輪宗一郎宅ワサビ田	43																			
			96/08/22	1.44	125	16.6	228	6.1	7.4	10.2	0.4	12.9	7.1	0.0	12.3	18.3	46.4	39.7	0.0	0.0	24.2
18	箕輪一二三宅ワサビ田	42	83/06/26	1.00	86	16.8	233	6.8	7.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/04/30	1.80	156	15.8		7.1	8.1	12.1	0.9	16.3	9.7	0.0	9.5	16.4	55.2	50.4	0.0	0.0	22.2
			96/08/22	0.01	1	16.6	257	6.3	7.3	12.2	0.5	15.1	7.9	0.0	12.7	19.9	41.7	70.8	0.0	0.0	22.1
19	長田宅前	42	83/06/26	5.02	434	15.9	227	5.4	7.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/22	0.50	43	16.6	210	6.3	7.3	10.5	0.4	12.4	6.6	0.0	13.2	16.8	51.3	29.6	0.0	0.0	22.9
20	平川宅隣	44																			
			96/08/22	0.22	19	16.8	175	6.3	7.3	9.3	0.4	10.8	5.7	0.0	13.0	12.0	48.8	17.3	0.0	0.0	23.6
21	長谷川病院	42	83/06/26	0.00	0	12.0	214	7.2	7.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/22	-	-	25.6	193	6.6	7.4	9.5	0.5	11.4	5.7	0.0	10.0	11.0	65.4	13.5	0.0	0.0	23.8
22	山越道雄宅	37	83/06/26	涸渇																	
			96/08/23	1.00	86	17.2	185	5.8	7.8	7.2	0.3	10.9	7.0	0.0	11.6	16.8	46.4	20.6	0.0	0.0	26.2
23	実篤公園	33	83/06/26	0.20	18	15.8	260	5.8	7.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/23	0.30	26	18.4	249	6.4	7.8	12.0	0.4	13.2	8.6	0.0	15.9	20.8	52.5	43.4	0.0	0.0	25.2
24	フェンス脇北村俊郎宅前	33	83/06/26	0.06	5	10.9	231	7.2	7.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/22	0.05	4	20.6	218	5.2	7.8	10.6	0.3	11.3	7.5	0.0	14.8	19.2	46.9	35.7	0.0	0.0	25.6
25	堀川晶仙宅	32	83/06/26	0.26	22	15.2	239	6.1	7.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/22	0.69	59	16.2	212	5.4	7.8	10.9	0.3	11.4	7.3	0.0	13.4	19.1	47.8	37.5	0.0	0.0	26.5
26	みつ池Ⅰ	30	83/06/26	0.01	1	11.8	228	5.8		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/04/30	1.03	89	15.8	183	6.0	7.8	11.0	0.6	12.2	8.2	0.0	7.2	14.4	49.2	35.5	0.0	0.0	24.4
			96/08/22	0.84	73	16.2	212	5.5	7.6	10.9	0.3	11.0	6.9	0.0	9.8	18.1	45.2	33.6	0.0	0.0	24.8
27	みつ池Ⅲ	30	83/06/26	涸渇																	
			96/08/22	0.49	42	16.3	200	5.2	7.8	11.4	0.3	12.1	7.7	0.0	13.7	21.3	46.4	34.3	0.0	0.0	25.1
28	神明の森	30	83/06/26	0.10	8	15.6	255	6.0	7.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/22	0.19	16	16.2	217	5.2	7.8	12.1	0.3	11.2	7.6	0.0	13.0	18.7	42.7	38.9	0.0	0.0	26.4

表１－３　国分寺崖線湧水水質分析結果

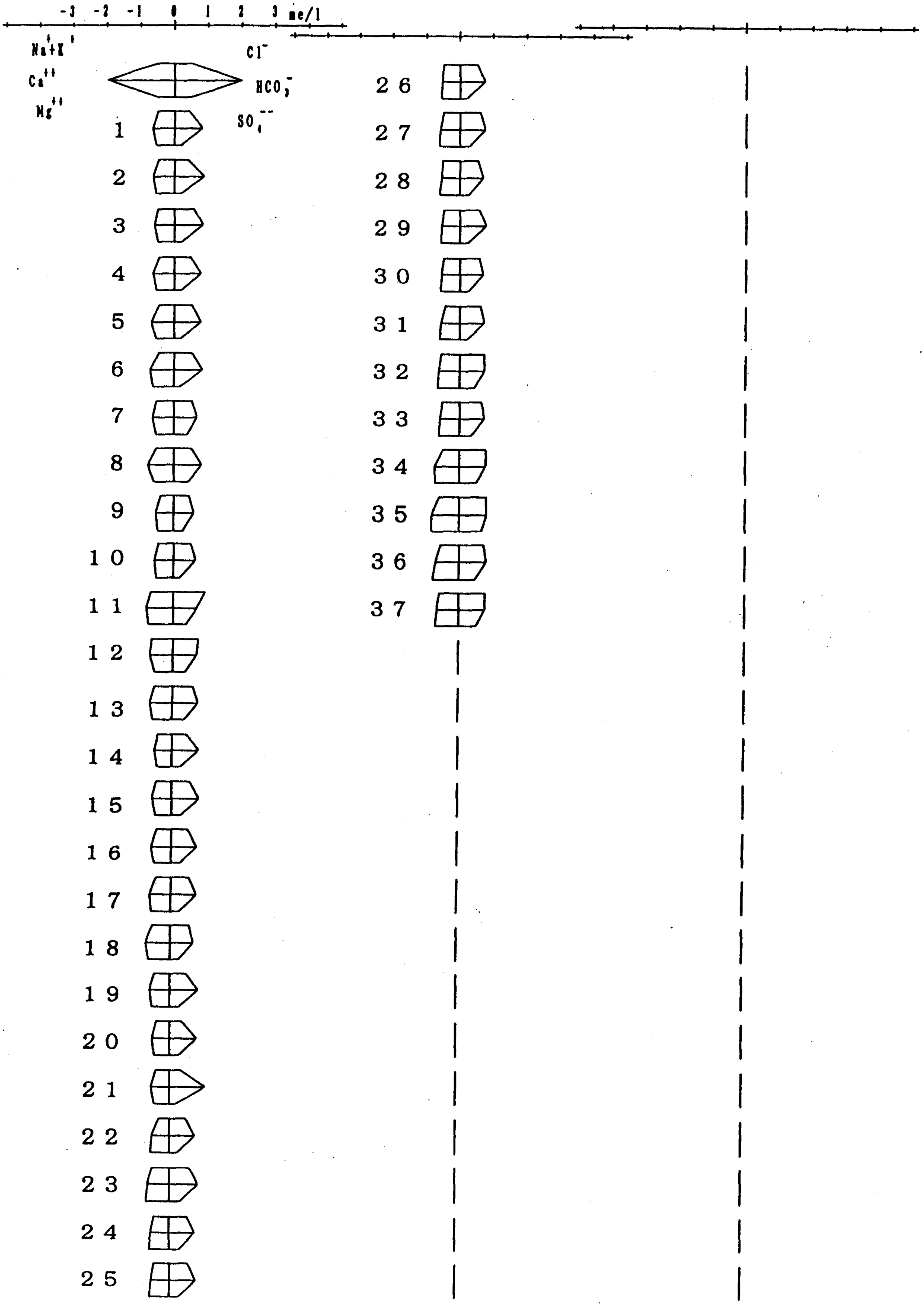
29	みつ池出口	26	83/06/26	0.26	23	12.0	246	6.8	7.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/22	1.68	145	19.2	212	5.2	7.8	11.2	0.3	11.2	7.1	0.0	11.9	20.4	47.8	31.8	0.0	0.0	25.4
30	香原宅	32	83/06/26	0.03	2	12.0	214	6.4	7.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/22	0.02	2	18.4	222	5.2	7.6	11.5	0.1	11.2	7.3	0.0	12.7	20.5	42.5	37.6	0.0	0.0	26.7
31	林野庁喜多見第二共同宿舎Ｉ	26	83/06/26	1.14	99	15.9	210	6.2	7.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/04/30	3.91	338	15.7	183	7.2	7.8	10.0	0.5	11.8	9.4	0.0	8.3	17.0	43.9	38.0	0.0	0.0	23.0
			96/08/22	1.83	158	17.4	184	5.5	7.7	10.4	0.3	11.6	7.6	0.0	11.0	21.6	44.7	35.7	0.0	0.0	25.8
32	林野庁喜多見第二共同宿舎Ⅱ（上	26	83/06/26	0.22	19	15.6	238	6.0	7.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/05/03	1.04	90	15.9	203	5.9	7.7	11.5	0.6	14.2	9.2	0.0	10.2	18.9	51.0	38.5	0.0	0.0	23.9
			96/08/22	0.58	50	16.6	239	5.4	7.6	13.0	0.3	13.1	8.1	0.0	21.4	25.4	45.6	32.0	0.0	0.0	24.1
33	林野庁喜多見第二共同宿舎Ⅱ（下	24	83/06/26	0.66	57	15.4	215	6.2	7.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/05/03	1.03	89	15.9	193	6.0	7.6	11.5	0.5	13.0	9.2	0.0	9.6	17.4	45.8	38.1	0.0	0.0	21.9
			96/08/22	0.80	69	16.4	225	5.2	7.8	11.8	0.3	12.1	7.6	0.0	17.2	23.0	44.7	38.2	0.0	0.0	25.3
34	林野庁喜多見第二共同宿舎内	24	83/06/26	0.07	6	15.4	234	6.2	7.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/05/03	0.08	7	15.6	225	6.1	7.7	10.5	0.6	17.0	11.0	0.0	15.9	22.5	54.7	32.7	0.0	0.0	23.1
			96/08/22	0.06	5	18.2	320	5.2	7.7	11.3	0.3	15.0	9.0	0.0	24.1	28.0	47.4	27.5	0.0	0.0	26.1
35	川島三郎宅	25	83/06/26	0.23	20	15.8	260	5.9	7.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			96/08/22	0.84	73	16.6	314	5.4	8.0	13.6	1.0	16.9	10.4	0.0	31.4	28.0	50.0	57.1	0.0	0.0	21.2
36	野尻宅	28	83/06/26	2.37	205	16.2	247	6.0	7.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			91/05/03	5.48	473	16.1	234	6.0	7.8	12.1	1.0	15.9	12.0	0.0	13.6	23.4	52.1	47.4	0.0	0.0	21.7
			96/08/22	4.02	347	16.8	285	5.7	7.8	12.9	0.5	14.3	9.8	0.0	23.2	25.8	49.3	42.5	0.0	0.0	24.9
37	大蔵住宅	28																			
			91/05/03	3.25	281	16.5	247	6.0	7.8	14.3	0.7	15.6	12.1	0.0	16.7	26.6	47.9	49.7	0.0	0.0	21.0
			96/08/22	3.30	285	17.0	197	5.4	7.6	13.6	0.4	13.4	8.8	0.0	25.0	27.7	46.6	42.5	0.0	0.0	26.0



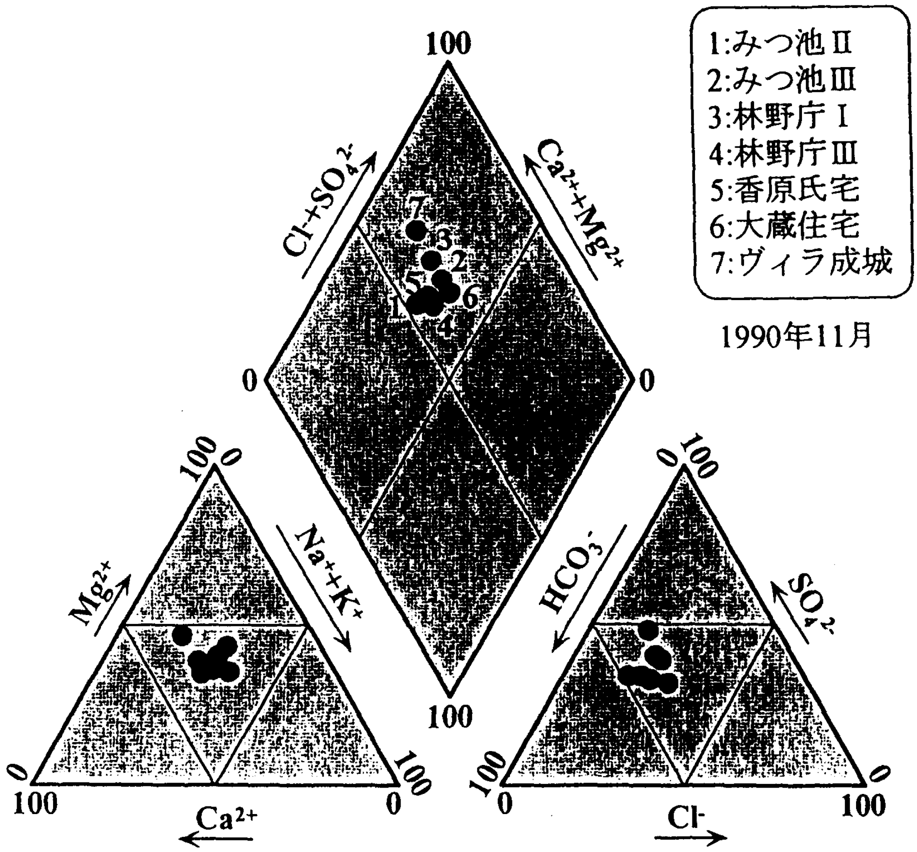
第2図　国分寺崖線沿いの湧水調査地点



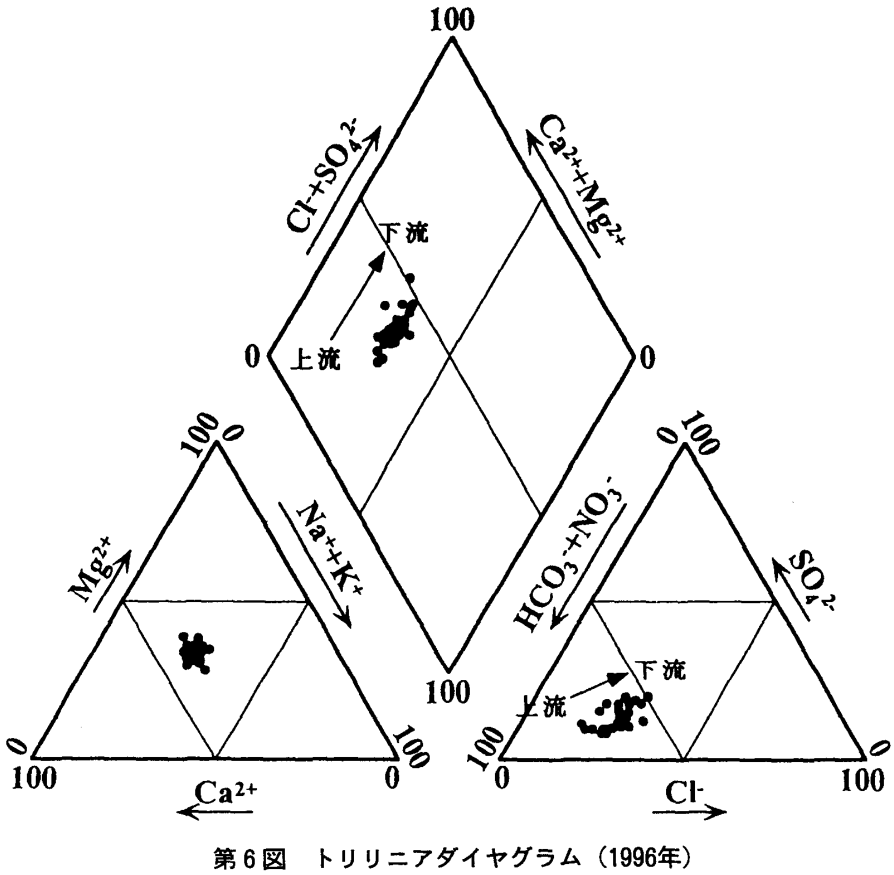
第3図　国分寺崖線沿いの湧水湧出量



第４図　1996年における湧水の水質ヘキサダイヤグラム



第5図　トリリニアダイヤグラム



第6図　トリリニアダイヤグラム（1996年）

かとなった。また、人為的水質汚濁の指標ともいわれるNO_3^-は、約10ppmから70ppm（T-Nにして約2.5～17.5ppm）までと幅広いが、平均約30 ppmである。また、これらの成分は一般に上流側で多く、下流で少なく、且つ13年前に比べて減少の傾向にあることを示した。

一方、湧水のトリチウム濃度は平均4.0T.Uと低い値を示していることから、湧水は涵養後1～2年以内、あるいは数ケ月以内の循環速度で湧出していることを思わせる。このようなトリチウム濃度の低い値は、自然値に戻りつつある傾向を示すものである。従って、トリチウムは、これから浅層地下水のトレーサとしての有効性が少なくなってきていることを示している。

一方、環境同位体を分析した結果（筑波大学地球科学系に依頼）$\delta^{18}O$は−8.0～−8.4（‰）、δDは−52.8～−56.0（‰）を得た。これは海抜高度などからして台地部のバックグランド値として適切な値と考える。

土地の透水性に密接に関係する要素としては、緑被率（地域全体のうち、実際に樹木・樹林・草などで覆われている土地の割合）、緑地率（地域全体のうち、山林・平地林・草地・田畑などの土地利用の面積の割合、水域は含まない）樹種などである。前2者について課題地域を診ると、緑被率（1995年）は、国分寺市47%、小金井市42%、三鷹市41%、府中市41%、調布市42%、狛江市39%、世田谷区30%で、緑地率（1972年～1995年）は、北多摩南部では1972年ごろが最大で33%、最近で17～18%、北多摩西部では1972年が最大で49%、最近で31%であり、いづれも上流で大きく、下流域ほど小さく、近年ほど減少することになる。

3．湧水と遺跡の位置の関係

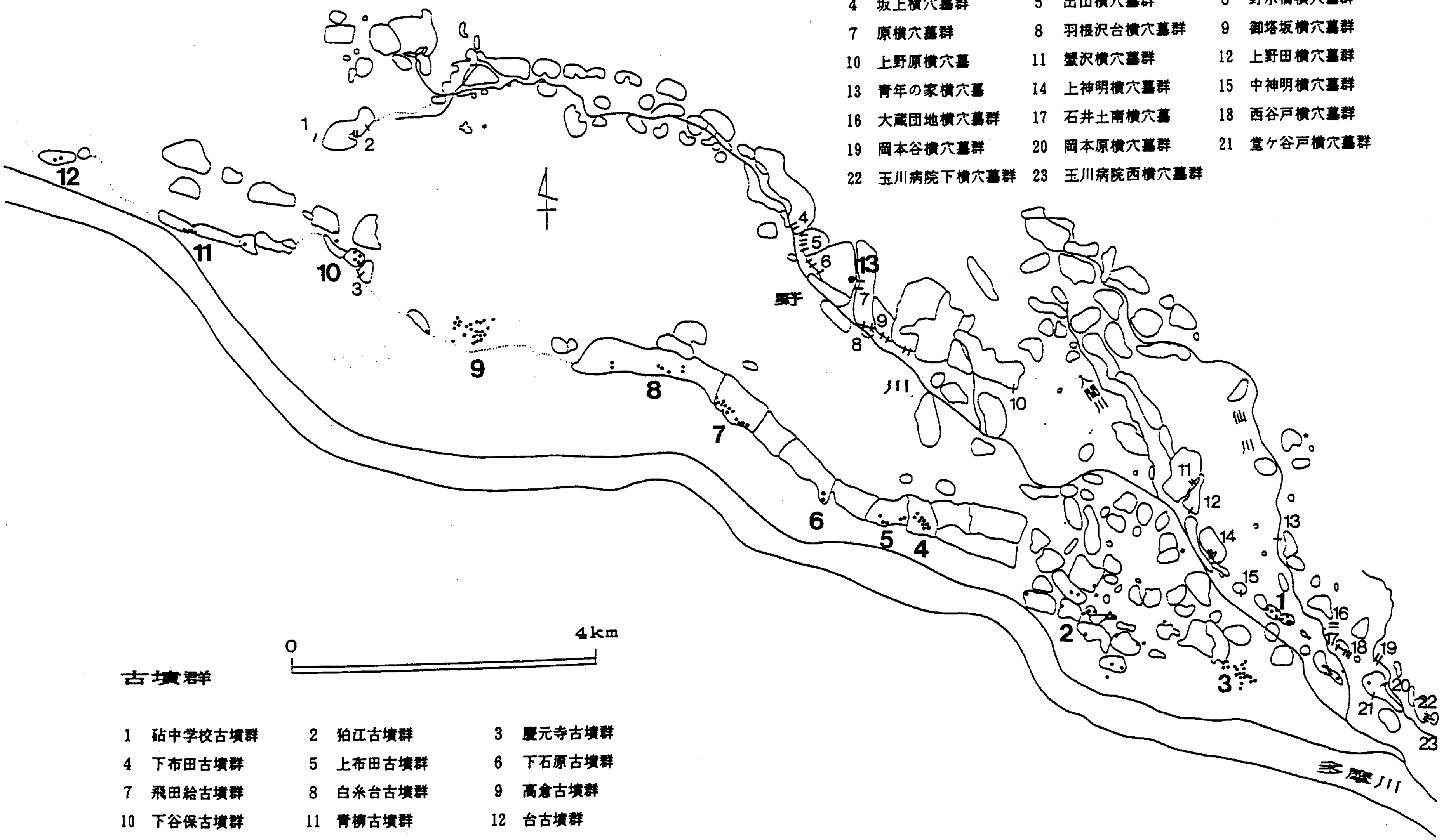
図1、図7などでも明らかなように、野川流域における湧水と遺跡の分布は極めて密接な関係がある。しかも、細部にわたり調査すると、遺跡の種類にもよるが一定の法則性があるようである。例えば、図7に示す古墳群は、一段低い府中崖線沿いなどの、すなわち水辺の一段高位面に分布するが、横穴墓群は国分寺崖線などの崖線を利用した例が多いばかりでなく、湧水地点の真上に位置することはなく湧水地点から少し離れた両サイドに位置して分布することが多い（図8）。この理由は、湧水地点は第三紀層の凹地形のところに堆積したと思われる砂礫層に向かって垂直に雨水がローム層中を浸透して収束し湧出していることが多く、第三系の凹地より凸地形部分の土壌水分（ローム層の）は少ないためではないかと考える。また、横穴墓の底面は、地下水面はもとより、東京パーミス層より高位か、同位にある場合が多い。このため、横穴の崩壊が免れている。このように、遺跡の位置の選定は古代人の豊かな経験的から得たものである。

Ⅲ．野川流域における遺跡立地の概要

生活と水との関連は、古くからの研究主題の一つであり、それぞれの時点における資料を分析して様々な研究が行われてきている。近年における成果として、野川流域を含め、多摩川水系における人文活動は、昭和62年に発行された『多摩川誌』により包括的に記載されている。この中では考古学上の遺跡と水との関わりあいも、先土器時代から古代まで時代を分けて概観されている[(12)]。また、地域的な雑誌として武蔵野文化協会発行の『武蔵野』などにおいても繰り返し武蔵野地域の遺跡が特集されている[(13)]。

以下ではこれらを参考としながら、野川流域における各時代の遺跡の特徴を水との関わりを中心として瞥見したい。

ここでは『東京都遺跡地図』（平成8年版）により、野川流域に立地する遺跡を、時代別に概観したい。



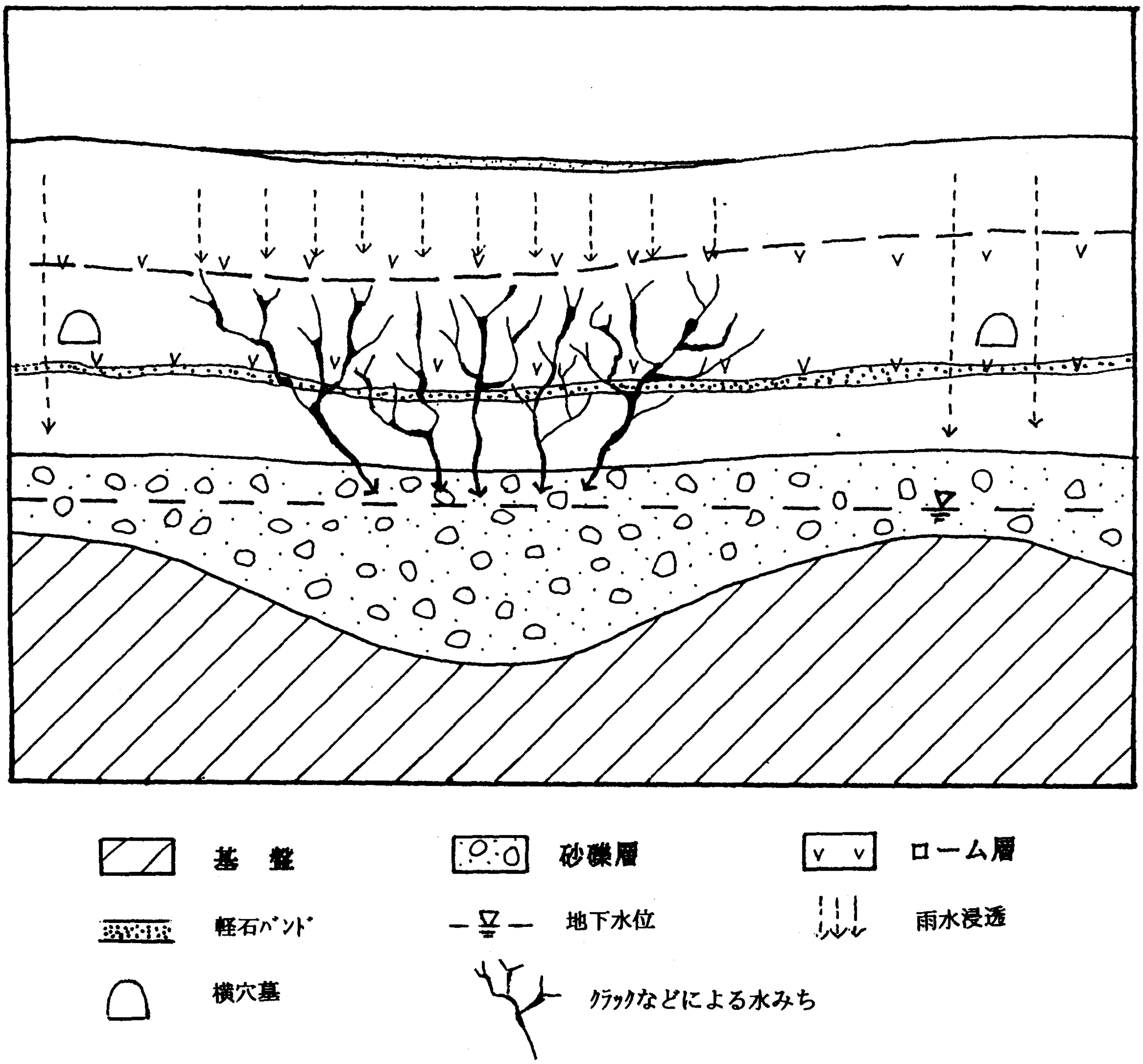
横穴墓群

1 内藤新田横穴墓
2 多喜窪横穴墓群
3 谷保東方横穴墓
4 坂上横穴墓群
5 出山横穴墓群
6 野水橋横穴墓群
7 原横穴墓群
8 羽根沢台横穴墓群
9 御塔坂横穴墓群
10 上野原横穴墓
11 蟹沢横穴墓群
12 上野田横穴墓群
13 青年の家横穴墓
14 上神明横穴墓群
15 中神明横穴墓群
16 大蔵団地横穴墓群
17 石井土南横穴墓
18 西谷戸横穴墓群
19 岡本谷横穴墓群
20 岡本原横穴墓群
21 堂ヶ谷戸横穴墓群
22 玉川病院下横穴墓群
23 玉川病院西横穴墓群

古墳群

1 砧中学校古墳群
2 狛江古墳群
3 慶元寺古墳群
4 下布田古墳群
5 上布田古墳群
6 下石原古墳群
7 飛田給古墳群
8 白糸台古墳群
9 高倉古墳群
10 下谷保古墳群
11 青柳古墳群
12 台古墳群
13 東京天文台構内古墳

第7図 横穴墓と古墳の分布



第８図　湧水付近の雨水浸透、水みちと横穴墓

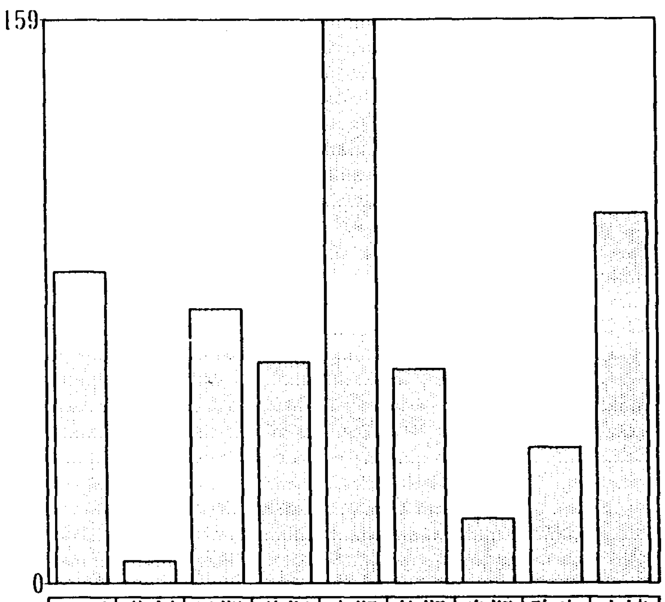
日本考古学における時代区分は、旧石器（先土器）時代→→縄文時代→→弥生時代→→古墳時代であるが、年代幅はそれぞれ異なる。

新石器時代に該当する縄文時代は土器の発生以降の石器時代であり約10,000年、弥生時代は金属器を使用した水田耕作を基盤とする生産経済の段階であり600〜700年、古墳時代は支配者としての各地の豪族のための巨大な墳墓が築かれた時代であり400〜450年の年代幅である。これに対し旧石器時代は人類の活動を道具としての石器の存在から想定される時代であり、調査の進展に従い順次古くなっており、現在のところでは日本においても50〜60万年前まで遡るであろうといわれている[14]。

１．旧石器時代

１）旧石器時代の遺跡分布

日本における旧石器時代、すなわち更新世における人類の活動の痕跡が明確になったのは、それほど古いことではない。昭和24年群馬県・岩宿遺跡のローム層中から石器が発見されてから、ようやく50年になるところである。



旧石	草創	早期	前期	中期	後期	晩期	弥生	古墳
88	6	77	62	159	60	18	38	104

第9図　遺跡数の変遷

野川流域に所在する旧石器時代の遺跡は、1～3万年前に堆積した火山灰である立川ローム層中から検出されている。その立地は野川に面する段丘沿いが主であり、容易に水の確保という点が確認できる。図示したところでは232遺跡中の38%の88箇所の遺跡がこの時代に属するものである。

このうちでも特に野川上・中流域の、野川に面する国分寺崖線沿いの武蔵野段丘上に立地する遺跡が顕著であり、一段低い立川段丘に立地する遺跡は少ない。また、支流の入間川・仙川の上流域にも遺跡の集中立地が確認できる。立川段丘と、一段低い多摩川の沖積地を限る府中崖線沿いの立川段丘縁辺に立地する遺跡も認められるものの、野川上・中流域の比ではない。

野川流域の遺跡は、旧石器時代の研究において重要な位置を占めている。すなわちそれ以前に各地で行われて来た調査が小規模であったのに対し、昭和45年に野川遺跡（東京都調布市・国際基督教大学構内）で行われた調査は、組織的に大規模に行われた多大な成果を挙げた点において、時代を画するものであったと位置づけられている(15)。

以後この時代に属する遺跡も多数発掘調査されており、時期的に変遷する石器の内容も明確になってきている。

2）主要遺跡概観

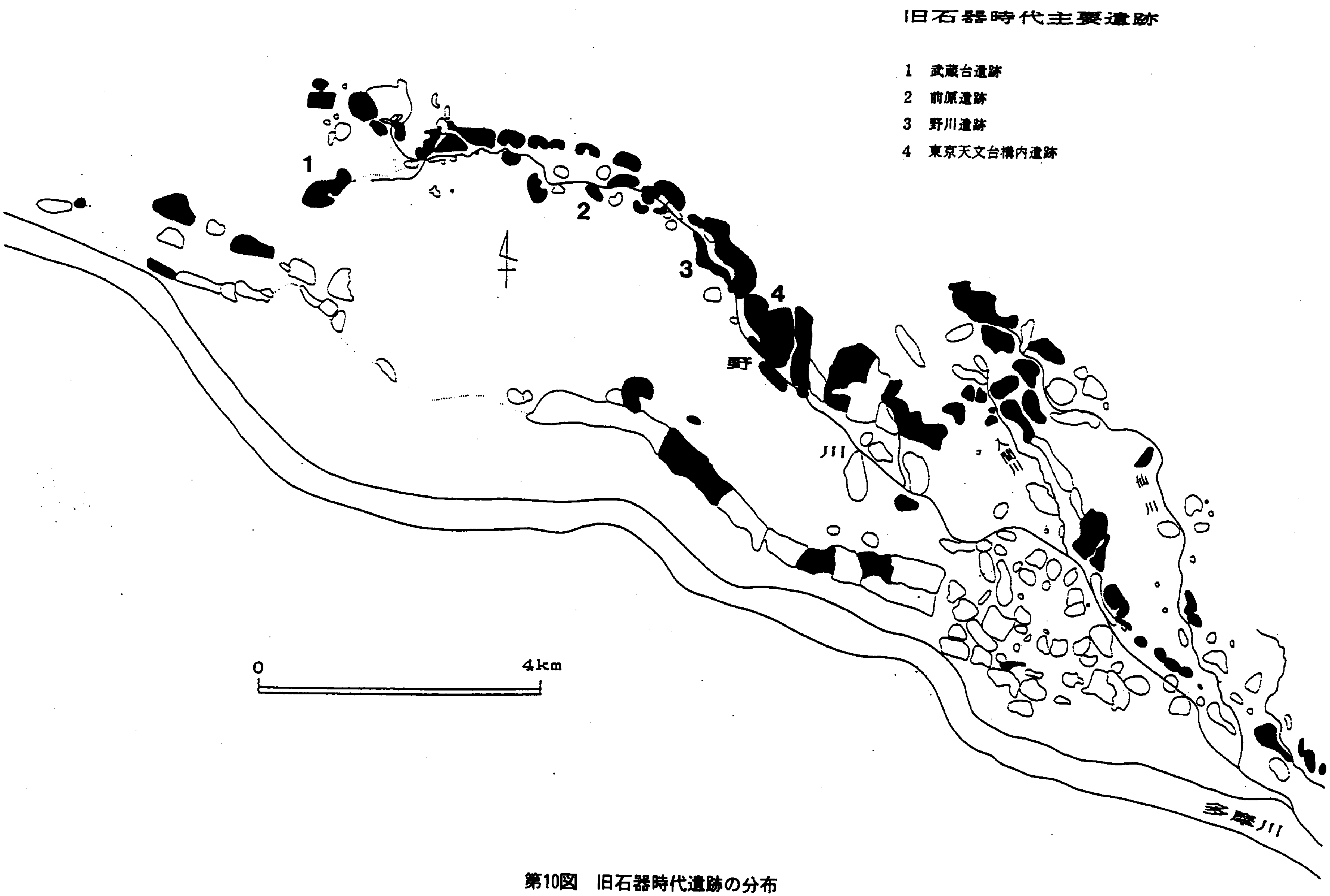
野川遺跡は野川の中流域の立川段丘面上の、野川を臨む舌状台地に立地している。厚さ約5ｍの立川ローム層中のⅢ層からⅧ層に及んで、ナイフ形石器を主体とする石器が出土する10枚の文化層が検出されている。これらは、ほぼ24,000年から12,000年前の所産年代が地質学的に想定されている(16)。

野川の上流域に位置する小金井市前原遺跡は、野川に面する立川段丘上に立地しており、昭和50年に発掘調査が実施されている。厚さ約3ｍの立川ローム層中のⅢ層からⅦ層にかけて7枚の文化層が確認され、同じくナイフ形石器を主体とする石器が出土している。

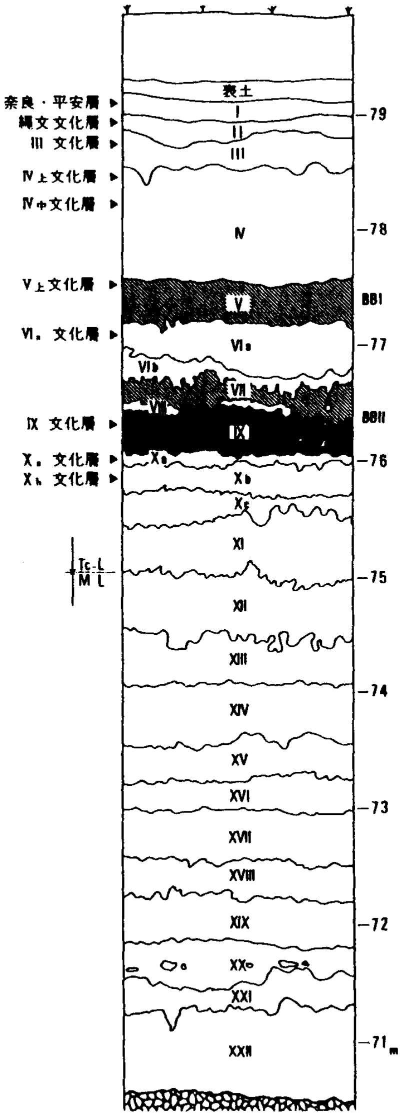
武蔵台遺跡は(17)、東京都・府中市の北端の野川の水源に近い国分寺崖線上の武蔵野段丘縁辺に立地する遺跡であり、昭和61年に調査された。厚さ3ｍの立川ローム層中の、最上のⅢ層より下より2層目のⅩ層に及んで8枚の文化層が検出されている。

Ⅲ層とⅣ層上文化層からは顕著な遺物は出土していない。Ⅳ層中文化層では2箇所に石器が集合して出土しており、礫の集中する礫群も調査されている。石器はナイフ形石器21点、スクレイパー21点、石錐1点、彫器1点、敲石1点などと多数の剥片を合わせて合計875点が出土している。これらの石材は黒曜石が主体をなすが、他に水晶、安山岩、砂岩などが用いられている。

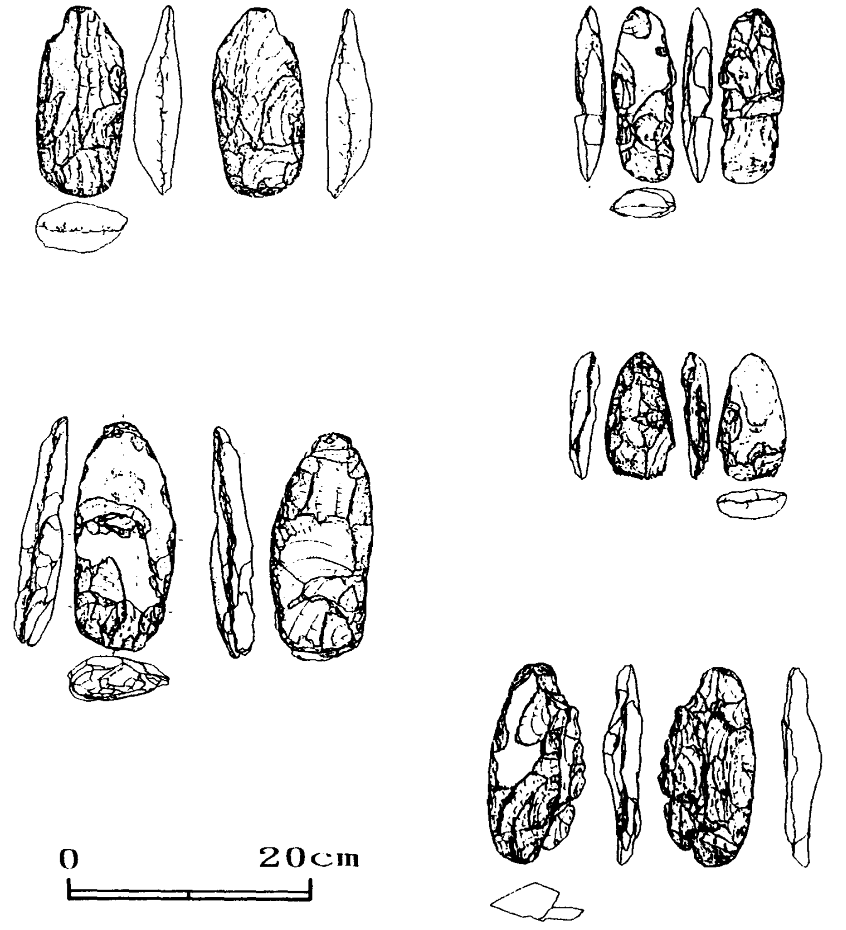
Ⅴ層上文化層は、幅50㎝の垂直分布を示すものであり、礫群も検出されている。石器はナイフ形石器4点、スクレイパー3点、切出形石器1点、礫器1点、などと多数の剥片を合わせて合計89点が出土している。Ⅴa層文化層は、幅60～70㎝の垂直分布を示すものであり、この面でも礫群が検



第10図 旧石器時代遺跡の分布



層位と文化層



Xb文化層出土の石斧

第11図　府中市・武蔵台遺跡

出されている。石器はナイフ形石器２点の多数ほか剥片を合わせて30点ほどが出土しており、石材は黒曜石が主体をなす。

IX層文化層からの出土は、ナイフ形石器２点、彫器１点、礫器１点数と多数の剥片であり、石材は上層では黒曜石が主体をなすのに対し、安山岩が主体をなしている。Xa層文化層からは、ナイフ形石器17点、と黒曜石製の局部磨製石斧１点が出土している。

最下のXb層からは、土坑２基が検出されている。150×150cmの規模で深さ80cmのものと、70×80cmで深さ15cmのものである。石器は剥片を加工した彫器・楔形石器などを主体として60点が出土している。中に大形の礫器６点と石斧７点が含まれ、打製石斧２点は砂岩と閃緑岩製、５点の局部磨製石斧はすべて砂岩製である。

三鷹市の東京天文台構内遺跡は[18]、国分寺崖線上の武蔵野段丘縁辺に立地する遺跡であり、野川中流域の三鷹市大沢に立地する。昭和56年に調査されており、厚さ約４ｍの立川ローム層中のIII層からIX層に及んで、８枚の文化層が確認され、基盤の武蔵野礫層までの深さは約９ｍである。

Ⅲ層文化層では石器の集合が２箇所確認されており、ナイフ形石器14点、細石刃５点、尖頭器２点、彫器・礫器・スクレイパーなどが出土している。

Ⅳ層上文化層では石器の集合が10箇所確認されており、最も充実した内容を示している。石器の集中からは活動の単位を復元することが可能であり、集落構成も復元されている。出土した石器は、ナイフ形石器が主体をなして52点、この他スクレイパー９点、台形石器７点、敲石４点、尖頭器１点、礫器２点などである。

Ⅳ層中文化層では礫群が伴うが、出土石器はナイフ形石器５点とスクレイパー敲石などである。Ⅳ層下文化層からは、ナイフ形石器３点と敲石が出土している。

Ⅴ層文化層からは、ナイフ形石器12点、スクレイパー３点と敲石５点が出土し、Ⅵ層文化層からは、黒曜石製のナイフ形石器と頁岩製の彫器が出土している。Ⅶ層・Ⅸ層文化層からは、珪岩製の剥片が検出されたのみである。

以上に野川流域の代表的な遺跡の概略を記した。これらの遺跡の調査により、明確になったところは、約30,000年から14,000年前の長きにわたり、縦長剥片の鋭利な刃を有するナイフ形石器が主体的な位置を占め、次いで約16,000年から12,000年前の間には槍先形尖頭器が使用され、最後の時期の約14,000～12,000年前にかけては細石器を特徴とする変遷が明確となっている。

これらはいずれも狩猟用の道具としての機能を果たしたものであり、これらに伴って様々な機能を有する石器が伴っている。

周辺地域の、東京都多摩市の多摩ニュータウンNo.471-B遺跡では[(19)]、武蔵野ローム下部に堆積している、約49,000前の堆積と想定される箱根起源の東京軽石層を挟んでの上下層から石器が検出されている。上層から10点、下層から３点の石器が出土しており、上層からは流紋岩製の長さ５㎝ほどの尖頭器が１点出土している。

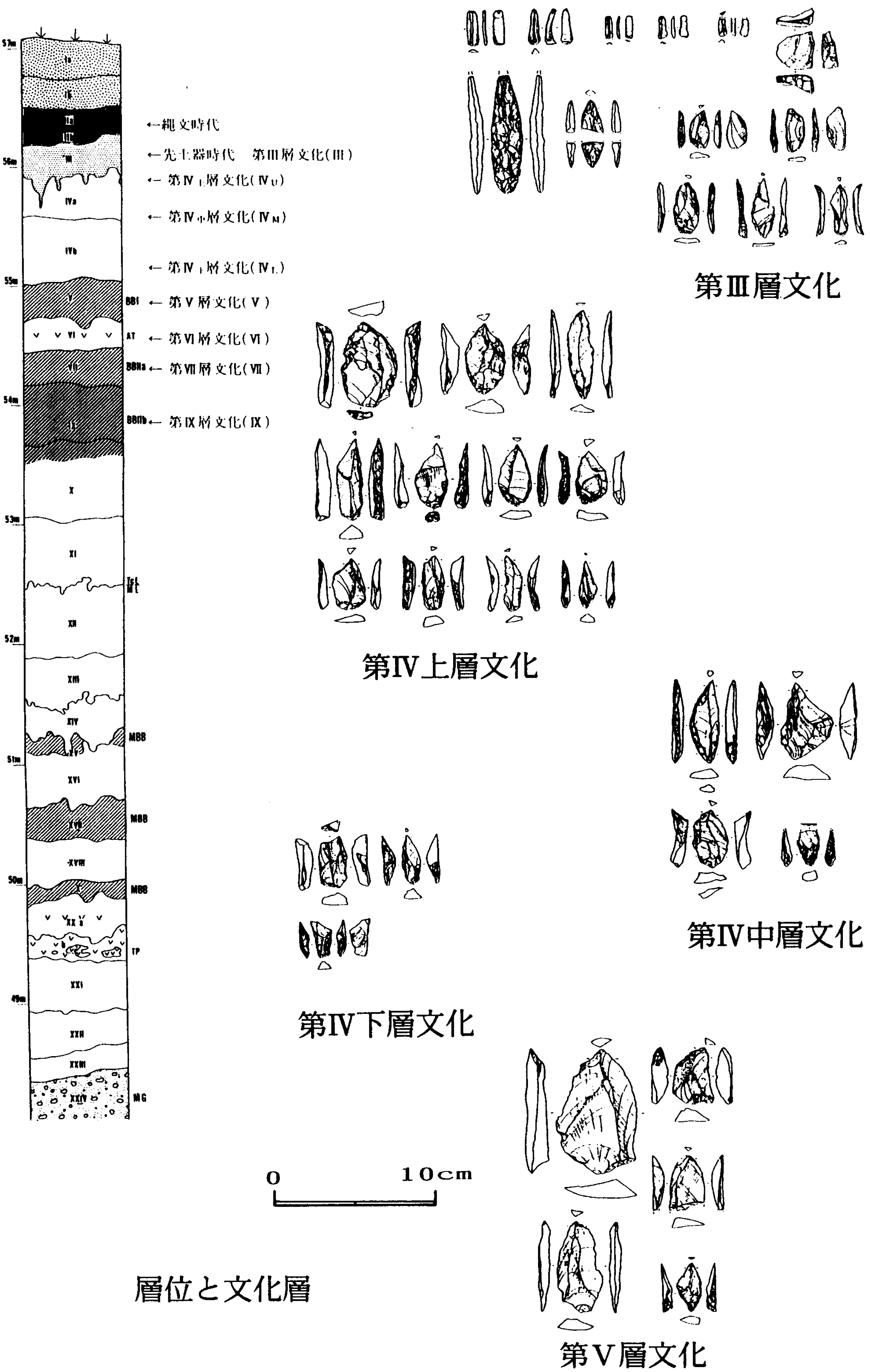
これは多摩地域最古の資料であり、３～１万年前の立川ローム層中から出土する石器が後期旧石器と呼ばれるのに対し、前期旧石器として区分されている。後期旧石器がナイフ形石器を主体的な石器としているのに対し、狩猟具としての尖頭形石器が認められ、より古い前期旧石器が確認されている東北・宮城県地方にも類似する資料が認められており、３～５万年前の主要な狩猟具として位置づけられている[(20)]。

３）旧石器時代の磨製石斧

1865年にジョン・ラボックによって石器時代が旧石器時代と新石器時代に区分されて以来、旧石器製作の技術的特徴は打製のみで磨製の技術を伴わないものとされて来た。しかるに我が国の旧石器時代の石器では、発見の端緒をなす群馬県・岩宿遺跡の調査において、関東ローム層中の立川ローム層に相当する地層中から、既に剥片を加工したナイフ形石器とともに、刃部を磨いて成形した局部磨製石斧が検出されており[(21)]、これが故に種々の問題を提起して来た。

磨く技術で成形された石斧は、確かに土器を伴う縄文時代に先行するものではあるが、あくまで新石器時代の所産として、これを無土器文化と理解する見解、土器の出現に明示される新石器時代・縄文時代に先行する時代であり、関東ローム層中の立川ローム層中のみに認められ先土器時代とする見解、立川ローム層中に認められる石器文化を縄文時代に先行する後期旧石器時代とし、武蔵野ローム層以前の地層中の石器を前期旧石器時代とする見解などである。

現在は、関東ローム層は更新世における火山活動の結果噴出された火山灰の堆積したものとされており、ローム層中出土の石器をもって新石器時代とする見解は認められないが、立川ローム層から出土する石器に対しては、研究史を踏まえて先



第12図　東京天文台構内遺跡

土器時代・旧石器時代の両様の時代名称の使用が認められる。

岩宿以降この種の刃部を磨いて成形した局部磨製石斧は類例を増し、立川ローム層中の後期旧石器時代に普遍的に存在するものではなく、地層中の最下部のⅨ・Ⅹ層中に限って出土する点が明確になっている。年代的には約30,000～24,000年前に想定されている(22)。しかしながら打製の石斧自体は7～8万年以前に溯って発見されており、後期旧石器時代に至って磨製石斧が打製石器とともに使用されたものと考えられている。

旧石器時代は氷河時代に相当し、立川ローム層の堆積した後期旧石器時代では、約2年前が最も寒冷な気候であったものと想定されている。この当時は平均気温は約7度低く、海面は100ｍほど低下し日本列島は一続きになっていたものと想定されている。

石斧の使用された時期は、最も寒冷な気候の前の亜間氷期の時期であり、かなり植生が豊かであったものと考えられており、更に狩猟具としては尖頭形石器あるいはナイフ形石器が存在することから、石斧は木材を伐採・加工するための道具であったものと考えられている(23)。

4）遺跡の変遷

後期旧石器時代約2万年の年代幅における遺跡の変遷は、決して一様ではない。野川下流域の16箇所の遺跡の内容の検討では(24)、立川ロームの区分に従って、Ⅲ層では9遺跡、Ⅳ層上で4遺跡、Ⅳ層下で10遺跡、Ⅴ層で2遺跡、Ⅵ層で1遺跡、Ⅶ層で6遺跡、Ⅸ層で2遺跡、Ⅹ層で2遺跡となる点が確認されており、気候の温暖化の始まった約1万8千～1万2千年前に遺跡が増加する点が明瞭である。この点は多摩丘陵部においても、ナイフ形石器の盛行期には遺跡数の増加が著しい点が確認されている(25)。

武蔵野台地における後期旧石器時代の遺跡は、台地を開析する中小河川の中・上流域に集中する傾向を示す。これは当時の集団が河川流域を単位として移動生活を果たした結果と理解されており、河川流域を越えての移動も考慮されている(26)。厳しい環境のなかでの小規模な集団が、長期間にわたり狩猟に基盤をおいた生業活動を行った痕跡が遺跡の集中として把握されるところである。その活動は水の確保できる河川を中心としての移動生活であり、野川中・上流域の遺跡の在り方もその典型である。

2．縄文時代

1）縄文時代の時期区分

野川流域においては、縄文時代の遺跡が主体的に展開している。縄文時代は土器の出現以降の石器時代の呼称として日本考古学で用いられている。明治10年にE.S. モースにより大森貝塚が発掘調査され、貝塚出土土器を文様の特徴からcord marked potteryとし、これを訳して縄文土器とし、ついには時代名称ともなったものである。昭和に入って以降、より古い縄文土器の追求が継続的に行われ、それぞれの特徴により、まず前・中・後・晩期の4時期区分が果たされ、次いでより古い土器型式の発見により早期が追加されて5期区分とされた。戦後の昭和30年代の終わりには更に古い一群の土器が確認され、草創期として区分され、現行の6時期区分が確立した。

現在のところ、土器の出現は放射性炭素などの理科学的年代測定法に基づき約12,000年前と想定されており、従って縄文時代の年代幅は、弥生土器特徴づけられる弥生時代の開始までの約1万年ということとなる。

各時期は理科学的年代測定法により草創期が約12,000年、早期が約9,000年、前期が約7,000年、中期が約5,500年、後期が4,500年、晩期が約3,200年前の開始年代と考えられている。従って各時期の年代幅は一様ではなく、草創期が約3,000年、

早期が約2,000年、前期が約1,500年、中期が約1,000年、後期が約1,200年、晩期が約800年ほどと推定される。

2）遺跡の分布

この時期区分に従って、野川流域を中心とする図示した範囲内における遺跡数の変遷を見ると、草創期は上流域を中心として6遺跡のみであるが、早期は飛躍的に増加して全域で77遺跡となる。以後も同様にほぼ野川流域の全域に展開して、前期は62遺跡であるが、中期は159遺跡と最大数を示している。特に縄文時代中期遺跡は、全域にくまなく展開している点が留意される。以後後期は60遺跡と早期・前期なみであるが、晩期は18遺跡と凋落し、多摩川と野川に挟まれた低地部分の世田谷・狛江地域に顕著となる。

これらの遺跡は、野川流域では国分寺崖線沿いの武蔵野段丘縁辺を中心として、立川段丘上にも分布し、更には野川の沖積面にも立地する遺跡も認められる。支流の入間川・仙川の流域でも両岸沿いに遺跡の立地が確認できるが、仙川中・下流域では希薄となっている。これは本来的な様相ではなく、市街化の結果として遺跡が確認できない状況を示しているものと考えられる。更には立川段丘と多摩川沖積地との区分である府中崖線沿いの段丘縁辺にも、集中的に遺跡が立地しており、この連続部分である多摩川と野川に挟まれた低地部分の世田谷・狛江地域では全面的な遺跡の展開が顕著である。

ここに窺われる縄文時代遺跡に顕示される段丘中央部における遺跡の欠如は、河川および湧水点を考慮した生活基盤の確保として理解される。この点に関しては、古く昭和19年に江坂輝弥により、武蔵野台地に展開する縄文中期集落をして、豊富な湧水を基点としてその周囲に集落が形成されたものと想定し「涌泉周囲聚落」と把握する見解が示されている(27)。

3）集団の領域

縄文時代の遺跡は、各時代において、個別遺跡が同様の規模・性格として認識されるものではなく、異なる性格の遺跡が一定範囲に組み合わさって領域内に存在し定住生活の維持を図っていたものと想定されている。すなわち長期間継続的に営まれた多数の住居からなる中核をなした大規模集落を中心として、その周囲に中核集落と連環する単時期の集落が伴い、更にはこれらの集落と関連する住居を伴わない遺跡が組合わさる。これら性格の異なる遺跡の集合として、居住した集団の領域が想定されている。

野川流域における縄文時代遺跡は、その最盛期としての中期の集落を対象としての研究が進められている(28)。これらによると、野川流域の縄文中期の中核をなした大規模遺跡としては、以下の諸遺跡が認められる。

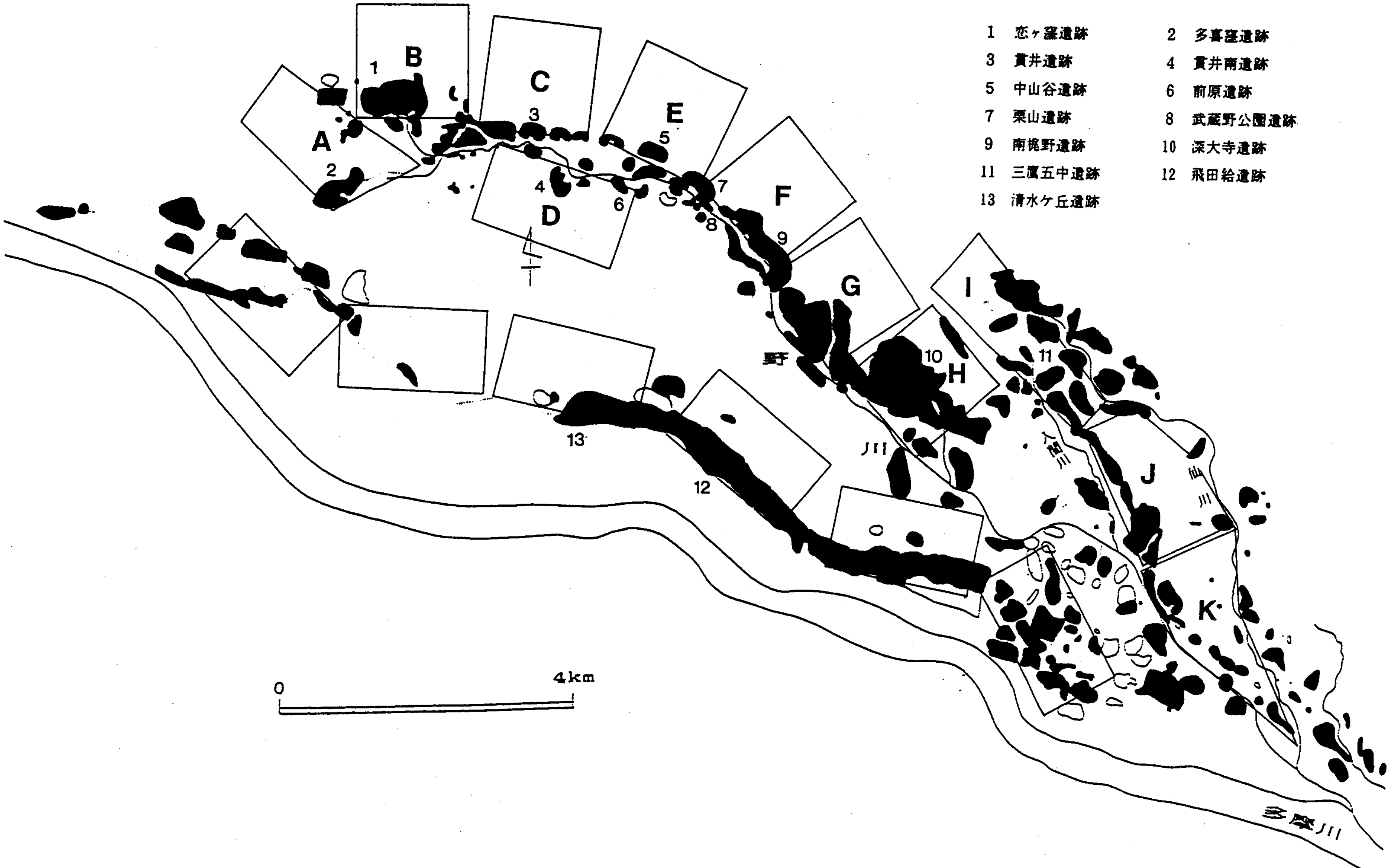
最上流域の水源地周辺に展開した武蔵野段丘上の国分寺市・恋ケ窪遺跡、上流域では、豊富な湧水により削られた窪みを囲んで立地する武蔵野段丘上の小金井市・貫井遺跡、立川段丘上に湧水を中心として展開している小金井市・貫井南遺跡、武蔵野段丘上で湧水を囲んで立地する小金井市・中山谷遺跡などである。

中流域では顕著な遺跡は確認されておらず、下流域では仙川と谷戸川に挟まれた台地上に立地する世田谷区・堂ケ谷戸遺跡が認められる。また支流の仙川上流域では三鷹市・五中遺跡、府中崖線沿いでは府中市・清水ケ丘遺跡が知られる。

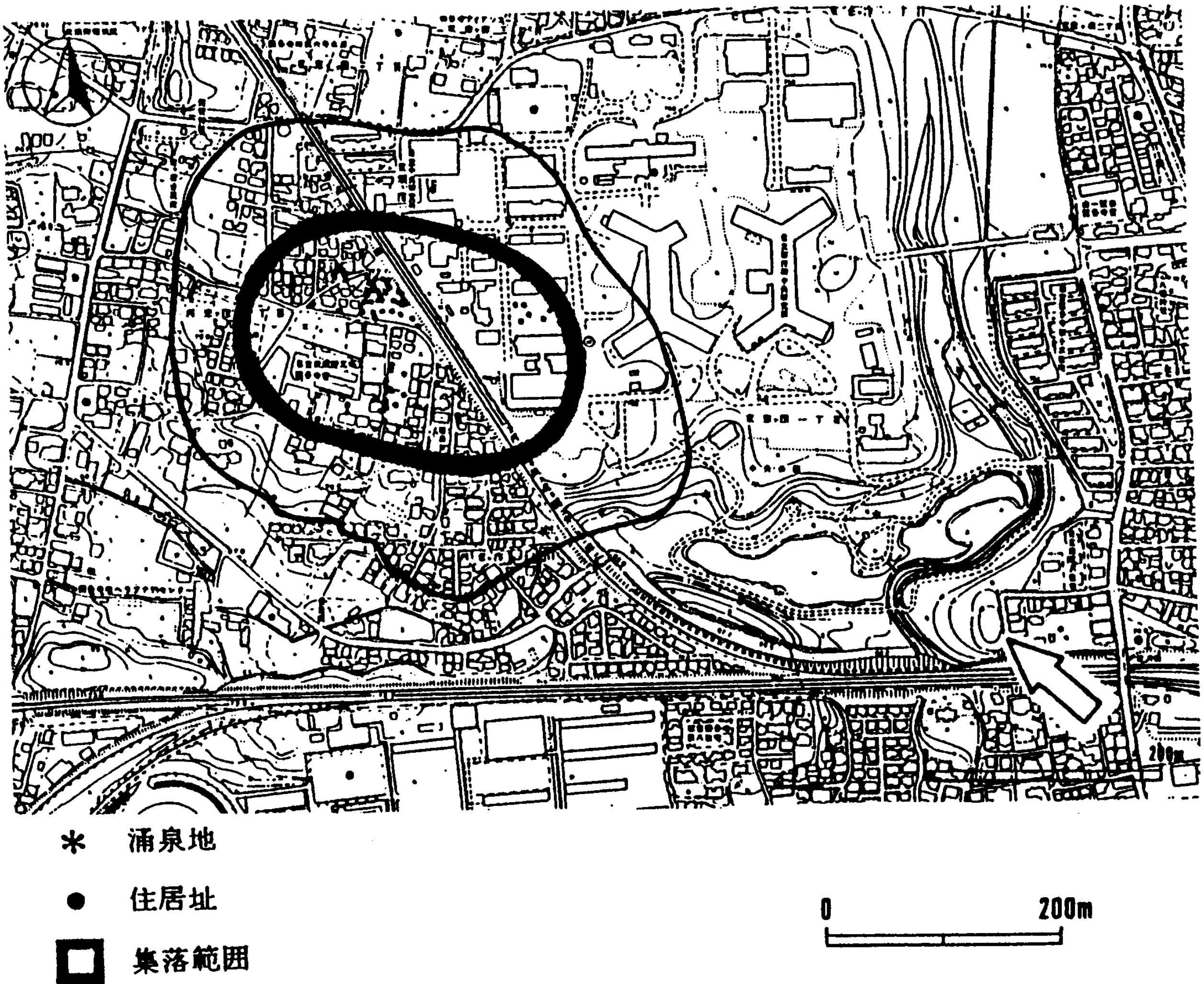
これらのうち国分寺市・恋ケ窪遺跡は(29)、三方を谷に囲まれた台地上に立地するものであり、台地裾には既に枯渇したものを含め10箇所以上の湧水が確認されている。遺跡は都会における遺跡の常として既に市街化しており全容の把握は困難である場合が多いが、地点別の発掘調査の集合として、100軒に近い竪穴住居跡のほかに多数の土坑などが確認されており、長軸300m、短軸200m

縄文時代主要遺跡

1 恋ヶ窪遺跡	2 多喜窪遺跡
3 貫井遺跡	4 貫井南遺跡
5 中山谷遺跡	6 前原遺跡
7 栗山遺跡	8 武蔵野公園遺跡
9 南梶野遺跡	10 深大寺遺跡
11 三鷹五中遺跡	12 飛田給遺跡
13 清水ケ丘遺跡	



第13図 縄文時代遺跡の分布



第14図　国分寺市・恋ケ窪遺跡

の楕円状に居住域が展開し、この内部に墓域が設定され外側に関連する施設が設けられたものと復元されている。

南１kmの武蔵野段丘上に立地する多喜窪遺跡では、12軒の住居跡が調査されている。武蔵野段丘上の貫井遺跡は(30)、貫井神社の所在する豊富な湧水により削られた窪みを囲んだ段丘縁辺に立地するものであり、湧水点の東側から40軒以上の住居跡が調査されている。

貫井南遺跡(31)は現河川との比高差２ｍを測る立川段丘上に立地しており、東西200ｍ、南北250ｍの範囲に集落が展開するものと想定され、26軒の住居跡が調査されている。同じ立川面の東側600ｍに展開する前原遺跡が、付随する集落と考えられる。

中山谷遺跡は国分寺崖線上に展開する遺跡であり(32)、崖下には湧水点が存在する。東西250ｍ、南北200ｍの規模と想定されており、住居跡45軒のほか多数の土坑、集石遺構などが調査されている。国分寺崖線上の東南700ｍに位置する小金井市・栗山遺跡が付随する遺跡と考えられるものであり、中期の遺構として住居跡数軒と多数の土坑が確認されている。

世田谷区・堂ヶ谷戸遺跡では40軒以上の住居跡が調査されており、仙川上流域の中核集落の三鷹五中遺跡(34)では、遺跡の約40％が発掘調査され中期の住居跡が73軒調査されており、直径280〜350ｍの環状の集落が想定され内側の広場からは多数の土坑が検出されている。

以上のほか付近に大規模な集落が知られていな

いものの、国分寺崖線沿いでは三鷹市・南梶野遺跡、調布市・深大寺遺跡、府中崖線沿いでは調布市・飛田給遺跡が、相応の内容を示す集落遺跡としてとらえられている。

これら中期の大規模で中核をな集落を中心として、野川流域に定住生活をおくった集団の領域が復元されている[35]。Aゾーンは国分寺市・多喜窪遺跡、Bゾーンは国分寺市・恋ケ窪遺跡、Cゾーンは小金井市・貫井遺跡、Dゾーンは小金井市・貫井南遺跡、Eゾーンは小金井市・中山谷遺跡、Fゾーンは三鷹市・南梶野遺跡を中心に想定されるものであり、Gゾーンは三鷹市・東京天文台構内遺跡が想定されている。Hゾーンは調布市・深大寺遺跡、仙川上流域のIゾーンは三鷹市・五中遺跡が中核を担う遺跡である。

またこのほか現状では中核をなす集落は分明ではないが、仙川流域ではJ・Kの2ゾーンが想定され、立川段丘上の府中崖線沿いにも清水ケ丘遺跡以外には明確ではないが、6ゾーンが想定されている。

この区分は、詳細な調査の行われた多摩ニュータウン遺跡内の発掘調査の成果に基づいている。多摩ニュータウン遺跡では、河川に面する台地上に中核をなす大規模な集落が営まれ、これに付随して性格の異なる遺跡が展開しており、その広さの平均は約220haである。この成果を野川流域において大規模集落を中心に想定したものであり、集落の前面に河川を確保し、背後に森林を確保したものとなっている。

縄文時代の生業は、この河川と森林を舞台として行われたものであり、狩猟・漁撈・採集活動に使用する各種の石器が出土している。従前は石器時代の食糧は、貝塚に顕著に示される如くに、狩猟と漁撈活動により確保される動物質のものが主体をなしたものと考えられていたが、調査の進展に伴いその主体は植物質のもので、狩猟・漁撈活動により獲得されるものは重要な副食であった点が明確になってきている。従って集落の背後に展開する森林地帯は、食糧の確保という点で極めて重要な場であったものと考えられる。

集落前面の河川は、漁撈活動の場として重要である。多摩川に面する府中崖線沿いの遺跡のみならず、支流の野川・仙川流域の遺跡からも、関連する資料が出土している。貝塚からは骨角製の釣針なども出土するものの、通有の遺跡からの出土は望むべくも非ず、土器の破片を小さく加工した土錘と石錘である。出土の様相は、府中崖線沿いの府中市・清水ケ丘遺跡、調布市・飛田給遺跡などに顕著であるが、野川流域の小金井市・中山谷遺跡、仙川流域の三鷹市・五中遺跡などからもまとまって出土しており、活動の実際が想定されるところである[36]。

4）水場遺構

水と生業との関連は、具体的には水場遺構の存在によって把握される。居住の内容は台地上の集落遺跡により復元が可能であるが、その土壌中の遺存という性質により有機質よりなる資料の遺存は期待できない。これに対し低地に立地する低湿地遺跡は、十分なる水分の保持によって、様々な有機質よりなる資料の検出が認められる。

従前の調査の主体は台地上の集落を中心として行われてきたために、水と生業の関わりを具体的に示す資料の把握はなされなかった。近年ようやく大規模な遺跡の発掘調査の一環として、台地の間の谷部分に調査が及ぶようになった結果として、この種の遺構が確認されるようになってきた。

東日本における縄文時代の水場遺構として著名な遺跡は、平成4～6年にかけて調査された、群馬県利根郡月夜野町に所在する矢瀬遺跡である。この遺跡は利根川に臨む段丘上に展開した約5,000㎡の規模であり、縄文時代後期～晩期にかけて造営されており、集落の中央に水場遺構を造成している。これは湧水点を6×4ｍの範囲で約

第15図　三鷹市・第五中学校遺跡

１ｍ掘り下げ、その窪地の周囲に石を貼り付けて区画造成し、水を溜めた施設であり、排水路は幅20～40cmで10ｍほどの長さが認められる。この水場遺構の周囲には、祭祀遺構と考えられる木柱列が多数検出されており、水と祭祀との関わりを示している。水場遺構の中からは多数の土器・石器の他トチノキ・オニグルミ・クリなどの種子が出土している。

すなわちこの遺跡における水場遺構は、飲料水および祭祀用の水の確保、木の実のアク抜きなどの食糧の加工、各種道具類の製作に関連する木器や繊維の水さらしなど多様な機能が想定されている。

他の遺跡の水場遺構でも、同様に多目的の利用が想定されている。特に縄文時代における食糧の主体をなすものと考えられている植物食のうち、堅果類はアク抜きを必要とするものが多く、その実際が確認される例も知られる。

埼玉県川口市・赤山陣屋跡遺跡では水辺に幅180cm、長さ750cmで深さ50cmほどの底板を有する板囲いの遺構が検出されており、そばには木道があり、この傍らにはトチの種皮からなるトチ塚が確認されている。この示すところは、板囲い遺構がトチの実などのアク抜きの施設であったであろうということであり[(38)]、この種の遺構は近年類例を増やしている。

野川流域において、水との関わりを具体的に窺うことのできる遺跡は、小金井市・武蔵野公園低湿地遺跡である[(39)]。野川調整池設置に伴う事前調査として、昭和58年に調査された。遺跡は武蔵野段丘上の国分寺崖線沿いに径300ｍほどで展開する小金井市・栗山遺跡の直下に当たっており、野川により形成された低湿地部分に立地する。遺物・遺構は旧石器時代から中・近世に及ぶものであるが、縄文時代の後期では廃棄された状態で多量の土器片と木材片・木製品、石器、さらにクルミ・トチなどの多量の種子が検出されている。

石器では、磨石・敲石・石皿などの植物食加工用の石器も出土している。また木製品の中の樋状木製品とされるものは、分割材の中心部を丸く刳り貫いた樋状を呈する遺存した部分は幅９cm、長さ15cmほどのものであり、導水に使用されたものと想定されており、種子のアク抜きに関わる施設に関連するものと考えられている。

この種の遺跡は、低湿地部分を発掘することにより確認されるところであるが、調査事例が僅少であることにより内容は豊富となってはいない現状である。調査の進展により水との関わりがより明確になるものと期待される。

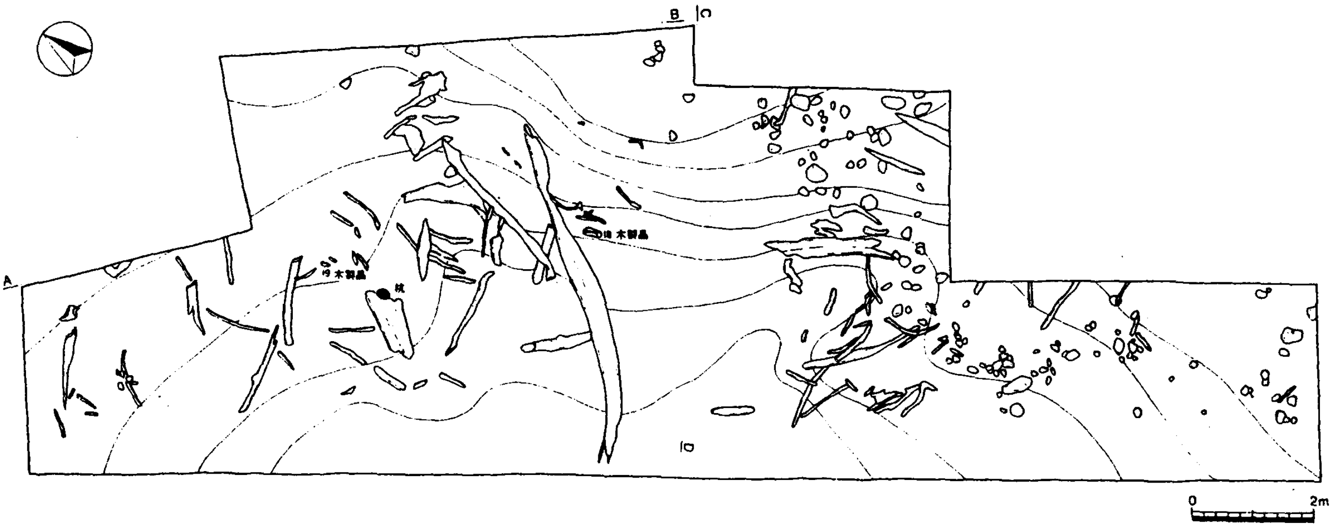
３．弥生・古墳時代

１）弥生・古墳時代遺跡の分布

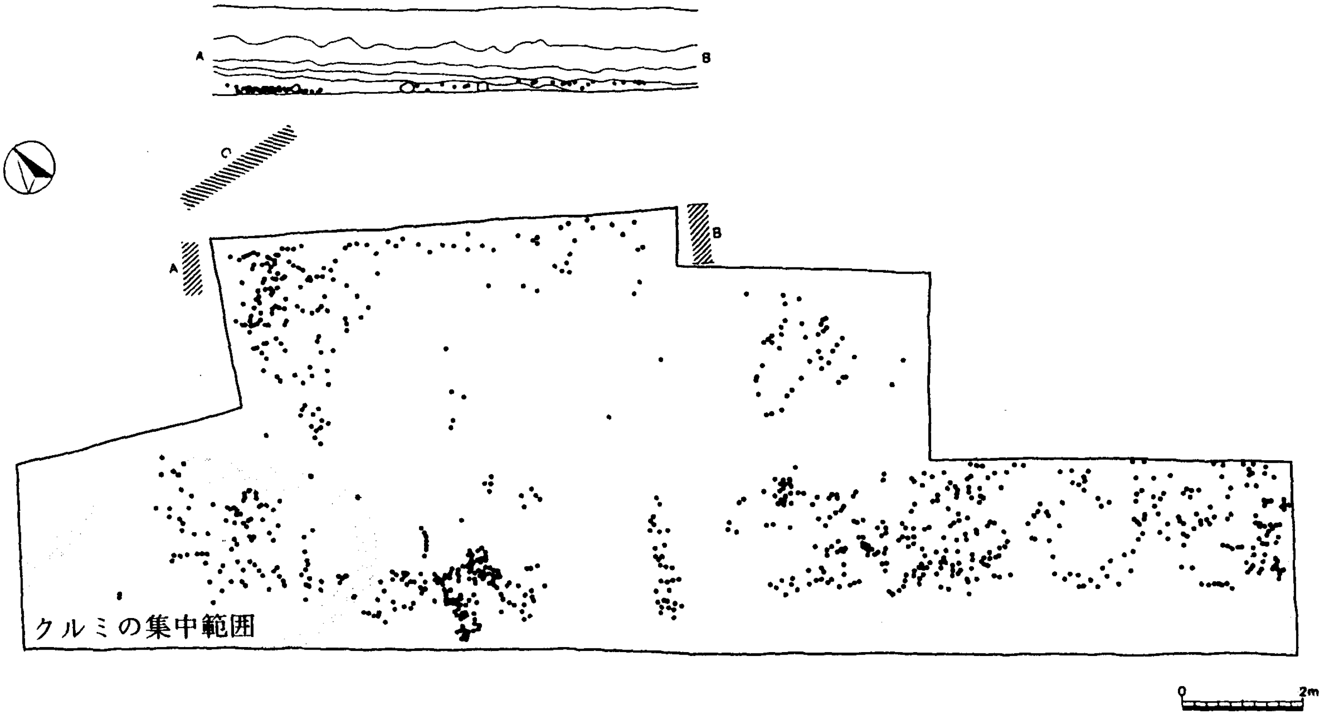
弥生時代の生業は水稲耕作を基盤とするものであり、新たに伝来した技術体系に基づいた革新的な社会が形成された。北部九州地方においては、紀元前400年頃に開始されたものと考えられており、紀元後３世紀代までを３時期に分けられている。関東地方に弥生社会が形成されたのは中期の頃であり、関東各地に盛行したのは中期後半以降、すなわち紀元前後以降のことである。野川流域における弥生時代遺跡はほとんどが後期のものであり、紀元１～３世紀代のものと考えられる。

古墳時代は支配者のための巨大な墳墓である古墳を表徴とする時代であり、３世紀の中頃から７世紀代までである。この時代も３～４世紀代を前期、５世紀代を中期、６・７世紀を後期と時期区分されているが、野川流域においては前期から後期に至る遺跡が確認されている。

野川流域における弥生・古墳時代遺跡の様相は、これ以前の旧石器・縄文時代遺跡とは際立った差異を明示している。第一点は遺跡数の僅少なる点であり、弥生時代と確認されている遺跡は、図示した範囲で38箇所を数えるのみであり、最盛期の縄文時代中期と比較すると４分の１である。しか



C区、材・木製品出土状態



C区、縄文土器・クルミ分布図

第16図　小金井市・武蔵野公園低湿地遺跡

しながら縄文晩期の遺跡数は18箇所であり、これと比較すれば2倍以上ということになる。古墳時代遺跡数は104箇所となり、弥生時代に比較すると大幅に拡大している。

第2点は際立った分布の差異である。旧石器時代の遺跡が野川の上・中流域を中心とし、縄文時代が流域全体に分布するのに対し、弥生時代遺跡は多摩川と野川に挟まれた、標高10〜30mの狛江・世田谷区域の低地部分を中心として存在している。この様相は古墳時代遺跡も同様であるが、遺跡の数を増し府中崖線沿いにも展開している。

前時代の遺跡の分布状況と大きく異なるこの様相は、基本的には生業の違いに基づくものと考えられる。水稲耕作のための水田の造営は、人工的な潅漑を行わなければ低湿地に限られる。遺跡の分布は、この点に関連するものであろう。

古墳時代の遺跡は、当然のことながら古墳との密接な関連が考えられる。標高10〜30m地帯には中期から後期にかけての大規模な狛江古墳群が展開しており、府中崖線沿いには適当な間隔で後期の古墳群が展開している。また、野川流域にはローム層を掘削して後期の横穴墓が造営されている。低地部分以外の古墳・横穴墓の周辺には、これらに関連する集落の存在が想定されるところであるが、現状では必ずしも明確にはなっていない。

野川の中流域と多摩川に面した府中崖線沿いの立川段丘面を含む調布市域における古墳時代の集落の様相は、野川の中流域の深大寺城山遺跡で前期の住居跡4軒であるのに対し、後期では11軒と増加している。後期の集落は下流の入間川との合流点に立地する入間町城山遺跡でも住居跡9軒確認されている。また府中崖線沿いの遺跡にあっては、飛田給遺跡で29軒、上石原遺跡で22軒、上布田遺跡で3軒と後期の集落の発展が顕著であり、府中崖線沿いに展開した後期高塚古墳群と関連するところである(40)。

しかし古墳の分布から想定すれば集落規模は貧弱であり、古墳造営となった集落の主体は多摩川の沖積地に展開していた可能性が極めて高い。多摩川の対岸やや上流の日野市・落川遺跡からは、水田下から古墳時代の大規模な集落が確認されており、同様な状況を想定できよう。

2）高塚古墳の分布

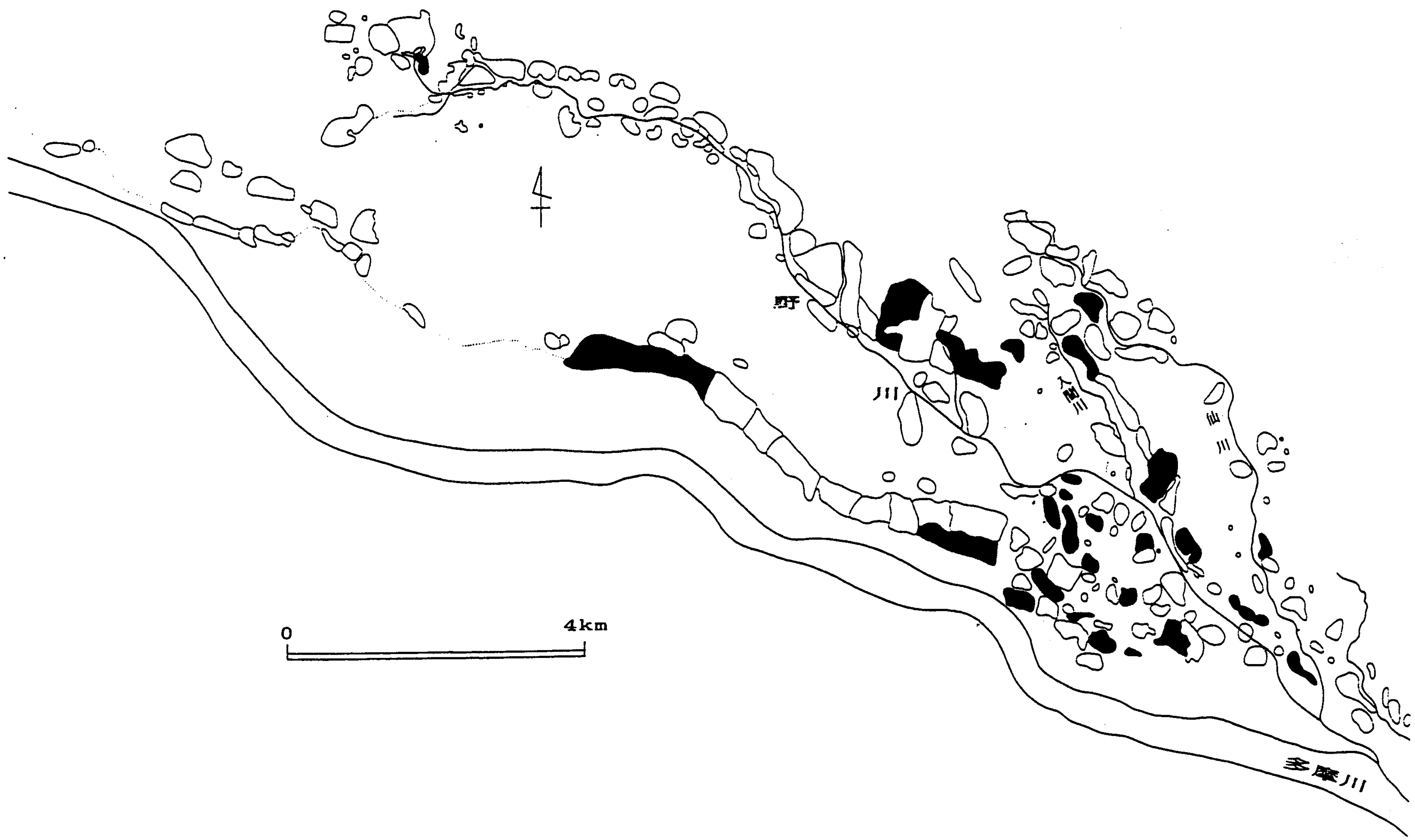
野川流域に展開した古墳は、主として古墳時代後期の横穴墓であり、最上流域の国分寺市域、中流域の三鷹市・調布市域、下流域の世田谷区域に分かれて分布している。墳丘を有する高塚古墳は、下流域の世田谷区域に集中している。

また図示した範囲内では、多摩川と野川に挟まれた標高10〜30mの低地部分の世田谷区・狛江市域に多くの高塚古墳が築造されている。さらに府中崖線沿いの立川段丘縁辺には調布市域から府中市・国立市・立川市域まで高塚古墳群の展開を確認することができる。

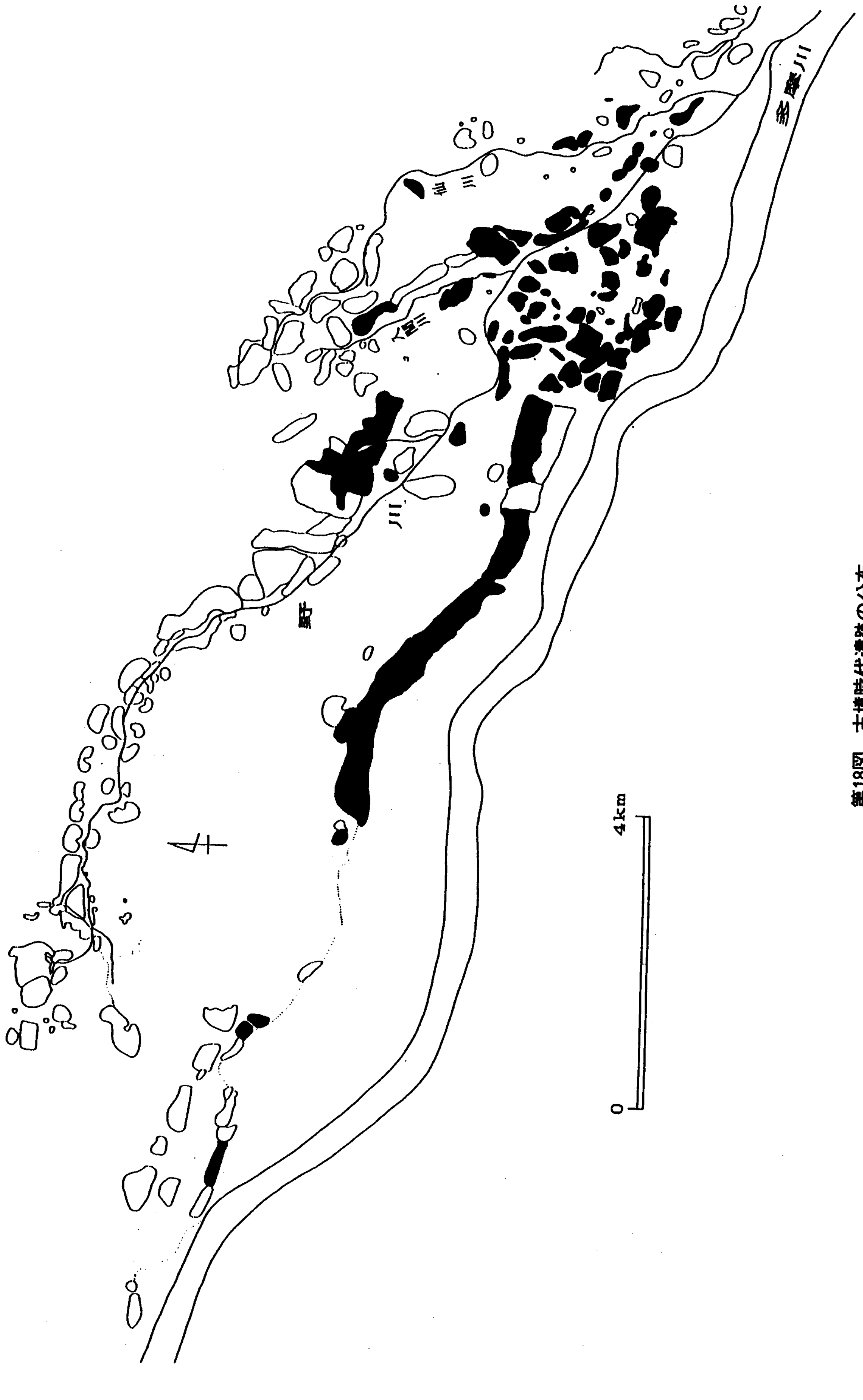
多摩地方における高塚古墳については、近時集成・報告されている。新たに調査を行い、従前不明であった資料を公開するなど、基本的な文献として重要なものとなっている(41)。

流域最古の築造年代の推定される古墳群は、世田谷区・砧中学校古墳群である。8基からなる古墳群であり、群中の第7号墳は全長60mの前方後方墳であり4世紀の後半代の造営年代が考えられ、径30mの円墳である第3号墳は5世紀前半代と推定されている(42)。他の古墳は、これらに後続して5世紀代から6世紀後半代にかけての築造と推定されている。

古墳時代において、最も優位な立場を表出するのは前方後円墳であり、前方後方墳はこれに次ぐものとして位置づけられている。4世紀後半代は関東地方において通有の古墳が出現する時期であり、多摩川流域においては下流域左岸の大田区域に蓬莱山古墳・亀子山古墳という100m規模の前方後円墳が築造されており、右岸の神奈川県域で



第17図　弥生時代遺跡の分布



第18図　古墳時代遺跡の分布

は日吉観松古墳・加瀬白山古墳という70～80ｍ規模の前方後円墳が築造されている。これらが最有力の古墳群として５世紀初頭までに築造されており、これに次ぐ勢力の墓域として砧中学校古墳群が位置づけられている。

類似した様相は、神奈川県域の鶴見川上流の横浜市・稲荷前古墳群に窺われる。全長38ｍの第16号墳が前方後方墳、全長47ｍの第１号墳前方後円墳が継続して４世紀後半代から５世紀初頭にかけて築造されている[43]。

すなわち砧中学校古墳群は、多摩川下流域左岸地帯において出現期の古墳として２番目の勢力を有した在地豪族の奥津城として築造されたものであり、その基盤は河川による沖積地における農耕であったものと考えられ、時代を異にしても水との関連は生産基盤である水田の確保という点で、極めて重要な点と認識される。

次期の当該地における重要な古墳群は、狛江市域に展開した狛江古墳群である。５世紀代から６世紀代にかけて築造された古墳群であり、1.5㎞四方の範囲に現存で22基、旧状では70基前後の古墳が密集して存在する様相は、初期の群集墳と位置づけられている。この古墳群の盟主墳は、全長48ｍの帆立貝式古墳の亀塚古墳であり、副葬品の一つとして倭五王時代に中国南朝との交易によって我が国にもたらされたと考えられている神人歌舞画像鏡が出土している[44]。

このような中央との密接な関連を想定できる当代一流の文物を出土した古墳の被葬者の性格が問題となるところであり、５世紀代の古墳に窺われる地方支配の一環としての中央政権との関わりが強調されている。南武蔵地域の在地豪族の墳墓である首長墓が小規模化するのにあわせて造営を開始しており、古墳造営集団の地域に占めた優勢なる状態が推察されるところである。

５世紀代の高塚古墳は、このほかに調布市域の府中崖線沿いの立川段丘縁辺に立地している。調布から立川市域に至る立川段丘縁辺には２～３㎞の間隔を置いて高塚古墳群が立地している。径10～20ｍ規模の円墳であり、大規模なもので径30ｍほどである。

現状で９基が確認される調布市・下布田古墳群、６基からなる調布市・上布田古墳群、２基の調布市・下石原古墳群、14基の調布市・飛田給古墳群、６基からなる府中市・白糸台古墳群、21基の府中市・高倉古墳群、７基からなる国立市・下谷保古墳群、２基の国立市・青柳古墳群、２基の立川市・台古墳群などである。

これら高塚古墳の埋葬施設は、下布田第２号墳が礫槨で５世紀代の所産であるが、他は河原石を用いて構築した横穴式石室である。この地域における横穴式石室の採用は６世紀の第４四半期以降であり、以後７世紀の中頃にかけて造営されたもの考えられる[45]。また墳丘が削平された結果古墳の周溝のみが確認され埋葬施設の不明である例は、横穴式石室以前の竪穴系の施設が考慮されるところであり、６世紀代の前半から中頃の築造と考えられる。埴輪を伴う古墳も下布田古墳群、青柳古墳群で確認されており、上流の日野市・七つ塚古墳群などとともに、留意されるところである。

これら立川段丘縁辺に立地する古墳群は、前面の沖積地を生産の基盤とする集団の支配者層の奥津城と考えることができ、個別集団の形成にかかるもののみであり、古墳の規模より想定すれば当該地域全体の支配者としての有力な在地豪族の存在を考えさせるものではない。

地域全体の支配者の古墳として考慮されてはいないが、個別地区の首長墓として考えられるのは、規模・出土遺物などから想定して切石を用いた横穴式石室を埋葬施設として構築した高塚古墳である。

野川流域を含む図示した範囲内におけるこの種の古墳は、世田谷区域に集中して築造されている。慶元寺古墳群中の喜多見稲荷塚古墳、殿山第１・

2号墳、大蔵第1号墳などであり、7世紀の初頭から中頃にかけての所産年代が想定される。前期以来の地域支配の中心地としての立地と考えられるものであり、生産基盤を踏襲した結果と想定されるところである。

この時期に新たに築造された注目される古墳は、野川中流域に所在する東京天文台構内古墳である。径25mほどの規模で切石を用いた横穴式石室を主体部として構築するものであり、その様相より7世紀の中頃の所産と考えられる(46)。

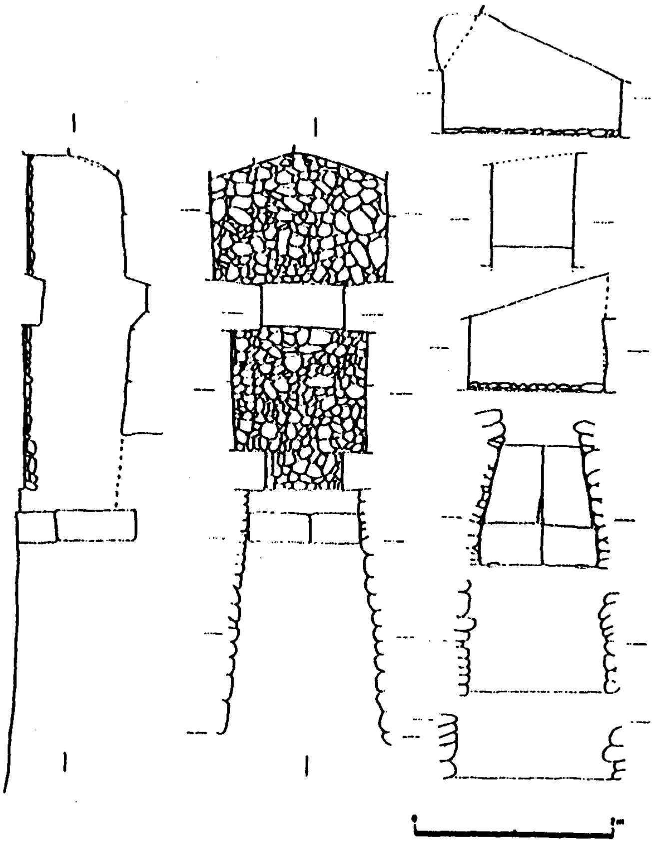
3）横穴墓の分布

横穴墓は、古墳時代中期後半すなわち5世紀後半代に北部九州、現状では豊前地区において横穴式石室を構造的規範として考案された墓制であり、関東地方へは6世紀の後半代に伝播し来たっている。南関東では三浦半島地区・房総半島地区・多摩丘陵地区・北武蔵地区などにおいて、6世紀後半の横穴墓が確認されており、7世紀代になるとそれぞれ異なる構造を呈するようになる(47)。

多摩川流域においても、下流域地区では6世紀後半代に初現するが、中流域においては主として7世紀代に展開している。

野川流域に主体的に展開した横穴墓は、地区を分かって分布している。いずれも国分寺崖線のローム層を掘削して構築するものであり、中流域の三鷹市域では武蔵野ローム下部に堆積している東京パミス層の上位に立地する点を特徴としている。

最多の数を誇る地区は、下流域の世田谷区域から一部調布市域にかけてであり、13群72基以上が確認されており、100基以上が構築されたものと考えられる。中流域の三鷹市域では6群54基の所在が確認されており、いまだに斜面の工事により発見され調査されており、100基に近い数が想定されるところである。上流域の国分寺市域では多喜窪・内藤新田横穴墓群の2群3基ほどである。これに唯一府中崖線に構築された国立市・谷保東方横穴墓を含めても3群4基のみである。

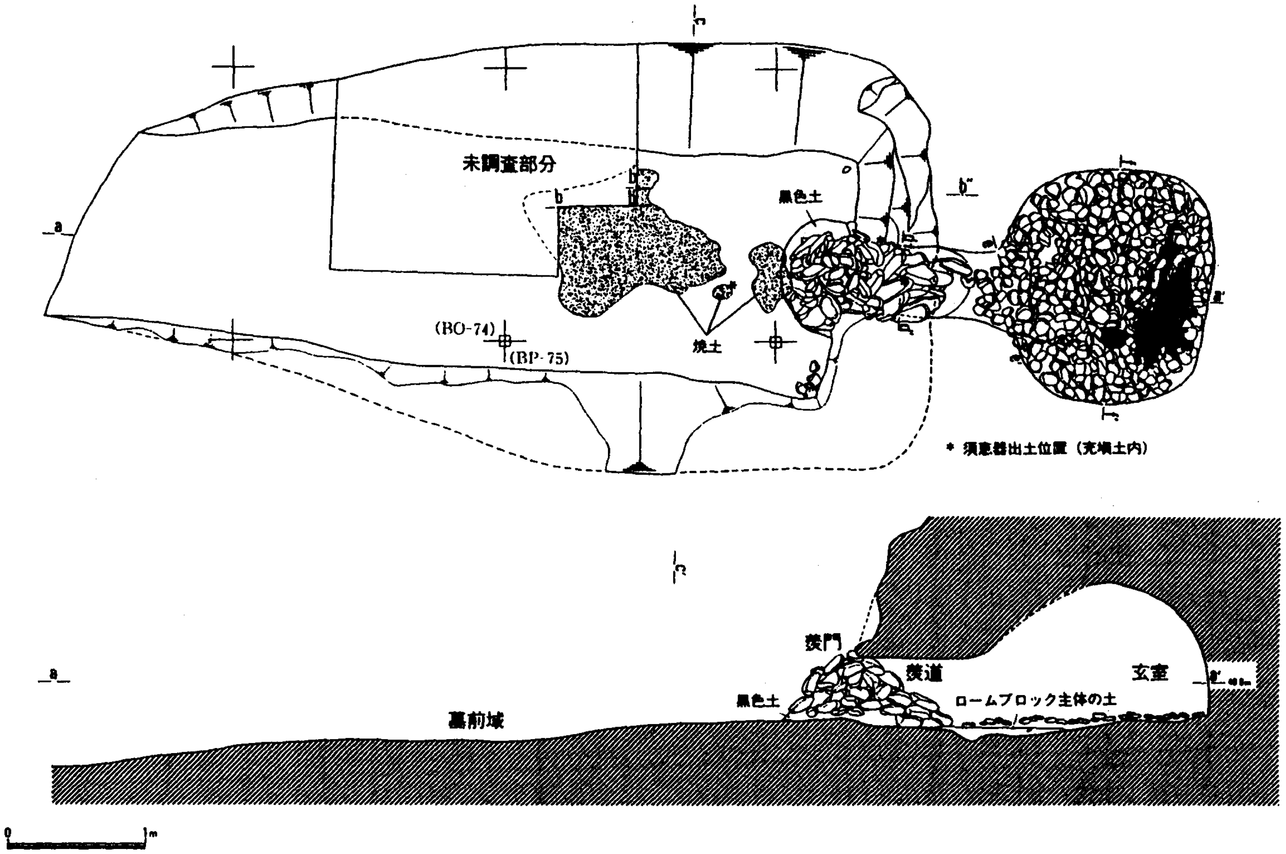


第19図　三鷹市・東京天文台構内古墳

横穴墓の構造は大きく2分できる。野川下流域に展開した横穴墓は、多摩川下流域の世田谷・大田区域に展開した構造に関連するものであり、三鷹市域の中流域・国分寺市域の上流域に所在する横穴墓の構造は、多摩川上流域の多摩・日野市域に展開した構造に関連するものである(48)。

これらの横穴墓は地区の首長墓として構築されたのではなく、高塚古墳の群集墳と同じく地区の有力階層に属する集団の墓制として採用されたものであり、当然に地区の首長墓との関連が問題となる。分布および時期的な点から、高塚古墳のうちの凝灰岩切石を使用した横穴式石室を内蔵する古墳が首長墓として認識でき、これとの関連が問題となる。

当該地区におけるこの種の石室は、野川下流域を含む多摩川下流域左岸では6世紀後半の初現以来、長方形の玄室平面を特徴とするものであり、



第20図　三鷹市・羽沢台第７号横穴墓

７世紀代には新たに正方形平面の石室が初現している。

これに対して神奈川県域の多摩川下流域右岸から上流域の多摩・日野・八王子市域では、石室の隅が丸くなった隅丸胴張り平面の石室が特徴的であり、顕著な差異を表している。

野川中流域に所在する東京天文台構内古墳は、切石を使用した数少ない古墳として注目される古墳であるが、その石室構造は隅丸胴張り平面構造の石室と関連するものであり、多摩市稲荷塚古墳・臼井塚古墳からの構造上の系譜が想定でき、この地域の横穴墓の系譜とも一致する。

野川中流域に７世紀前半代に顕在したこの様相は、横穴墓を集団の有力者の墓制、横穴式石室を内蔵する高塚古墳を集団の支配者の墓制として理解することができるところであり、地域開発の歴史を窺うことができる。

４．歴史時代

１）水辺の祭祀

近年の発掘調査の進展に伴い水辺における祭祀遺跡は、縄文時代の水場以降各時代の遺構が調査されてきており、生活に密着した祭祀の実際が究明されている。弥生時代以降の農耕を基盤とする社会にあっては、生産の基本をなす水田の維持が最大の課題であり、その維持のためには水の確保が前提となる。このため弥生時代以降の水辺から検出される祭祀遺跡は、豊饒を祈願する農耕祭祀が主体をなしている(49)。

祭祀を実践・主導した階層は地域支配者としての豪族であり、現今確認されている弥生時代以降の居館跡からは、農耕祭祀に関連する様々な祭祀遺物が検出されている。また遺構としては浄水を確保するための特別な井戸、あるいは特殊な導水施設などが居館跡から発見されているほか、湧水地点における祭祀場の痕跡も各地で明確となって

きている。また祭祀は豪族層に関わるもののみではなく、様々な場面で実修されており、水田の水口、湧水などにおける小規模な遺物の出土が物語っている。

しかしながら野川流域周辺においては、低湿地遺跡がそれほど発掘調査されていない現状に起因してか、顕著な遺跡は検出されてはいない。僅かに水辺における祭祀の内容が窺われる資料は、調布市下布田遺跡第36地点から検出されているのみである[50]。調査地点は府中崖線下の沖積低地であり、水田下からの発見である。崖に近い部分からは湧水を集める水路が検出され、ここから木製品を含む多量の遺物が出土している。

遺物は縄文時代から古代まで幅広く出土しているが、主体をなすのは奈良時代末から平安時代前半のものであり、鋤や櫛などの木製品のほか、文字を墨で書いた墨書土器が多量に検出されている。墨書土器には「田中」「乙二」「上」「万」「土」「立」などがあり、特に「国厨」銘から武蔵国府との関連が考慮されている。

至近地には、平安時代の『延喜式』の「神名帳」に記載されている式内社である布田神社の故地とされる「古天神」と呼ばれる地区があり、発掘調査されている[51]。『新編武蔵風土記稿』には、文明年間（1469〜89年）に多摩川の洪水のために現在の甲州街道の北側に遷座したことが記載されている。これらから推測して、下布田遺跡第36地点から出土した遺物は、国府が関わる式内社の祭祀が水辺で執行されたことを表わすものと考えられている。

周辺地域における類例は、多摩丘陵部の八王子市松木に所在した多摩ニュータウンのNo.107遺跡が知られる[52]。台地上には奈良時代後半から平安時代初頭にかけての集落が展開しており、台地の間の谷部から集落に関連する水場遺構が確認され、ここから木簡と2,000点を越える多量の木製品と墨書土器が検出されている。木製の皿には「全」「官」「位」などの焼き印が押されており、墨書土器には「全」「位」「益」「新位」「新全」などの文字が記されている。

この遺跡も窺われる文字の内容などから一般集落のみに関連するのではなく、呪符と考えられる木簡の出土もあわせて、公的な性格を有する祭祀がこの地で執行されたものと推測されている。

律令制度下にあっては国の中心として国府、この下に郡衙、郷家などの官衙が整備され、地方支配を実践しており、古墳時代までとは異なる様々な祭祀が執行されている。中でも水に関わる祭祀は、場の特性により有機質の遺物が保存され易いという点において資料を豊富にしている。歴史時代における水辺の祭祀は、従前の農耕祭祀のみではなく、斎串・人形・呪符木簡・墨書人面土器などの出土から、道教思想を基本とした悪霊祓・疫病神除けなど様々な祭祀が検討されている[53]。

2）野川流域における井戸

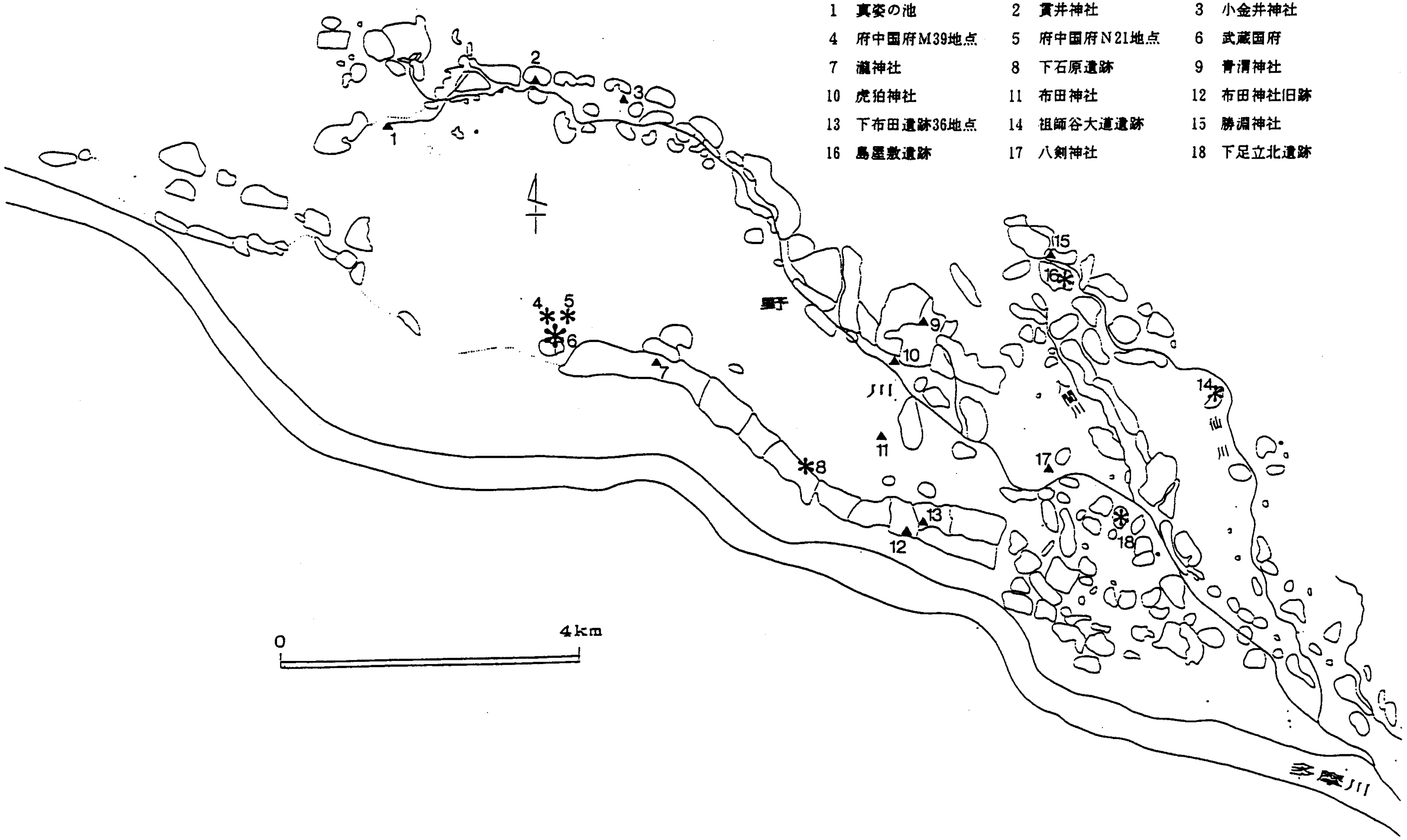
水の確保を自然の状態から主体的に行った時代を経過した後、居住域の拡散に従って大地を掘削して水を確保する井戸の構築が始まる。近年の大規模な調査の盛行に従って、井戸も全国各地の各時代の様々な遺跡から発掘されており、調査事例は増加の一途にある。

昭和57年に宇野隆夫は全国の井戸を集成研究し、時代に特徴的な構造と、その変遷を総括している[54]。井戸構築の上限は弥生時代であり、稲作を基盤とする農耕社会の確立に伴い、新たに伝来した技術の一環として位置づけられている。以降、弥生から古墳時代にかけては素掘り井戸が主体をなし、古代には木組井戸、中世には石組井戸が主体をなす。ついで石組井戸に加えて土製品組井戸が普及する近世から近代と変遷を明示している。

東国・関東地方における井戸は、弥生時代では明確ではない。続く古墳時代にあっても微々たる検出例であり、一般集落では普及してはいない。

神社・井戸・遺跡一覧

1	真姿の池	2	貫井神社	3	小金井神社
4	府中国府M39地点	5	府中国府N21地点	6	武蔵国府
7	瀧神社	8	下石原遺跡	9	青渭神社
10	虎狛神社	11	布田神社	12	布田神社旧跡
13	下布田遺跡36地点	14	祖師谷大道遺跡	15	勝淵神社
16	島屋敷遺跡	17	八剣神社	18	下足立北遺跡



第21図　歴史時代遺跡の分布

関東地方における古墳時代の井戸として著名なところは、5世紀後半代の所産にかかる、水濠で方形に区画された豪族居館としての群馬県群馬町所在の三ツ寺Ⅰ遺跡で検出された井戸である(55)。一辺86mの方形区画は1mの盛土で造成され各部に張り出し部が付設されており、周囲は幅35～40m、深さ3.5mの水濠で囲繞され、斜面は石を積んで石垣を成している。この造成に投入された労働量は、まさに古墳造営に匹敵するものであり、よく地域支配者としての豪族居館の性格を明示している。

井戸は、この遺跡の中心建物である大規模な掘立柱建物、およびこれに関連する建物に囲われた中に位置しており、上径1.53mの深さ3.5mの規模であり、杉材を刳り抜いて木枠としている。また周囲には4本の柱穴が確認されており、覆屋を伴うものであったことが判明している。内部からは祭祀に用いられた滑石製模造品が出土しており、よくその機能を明示している。

類似した状況での井戸は、畿内にあっては既に和泉市・池上曾根遺跡の弥生時代中期後半の例が知られている(56)。群馬県下においては近年さらに遡って確認されており、千葉県下にあっては6世紀代の井戸が確認されている(57)。今後各地で類例の増加するであろうことが予測される。さらに三ツ寺Ⅰ遺跡の周辺地区では、湧水地点を整備して潅漑用水路とする状況が確認されており、この時期に新たな技術の導入されたことが窺われる。

多摩川北岸の当該地区は、律令体制下にあっては武蔵国府が設置され国の中心として発展している。しかしながら古墳の存在に明示される6・7世紀の状況では、埼玉古墳群の存在に顕著な如くに北武蔵の地が武蔵地域の中心地であり、多摩川北岸の当該地区では狭小な地区を勢力基盤とする中小豪族の存在が推定されるに過ぎない。この状況は在地勢力の弱小な地を選定しての国府の設置という点を考慮させるところである。

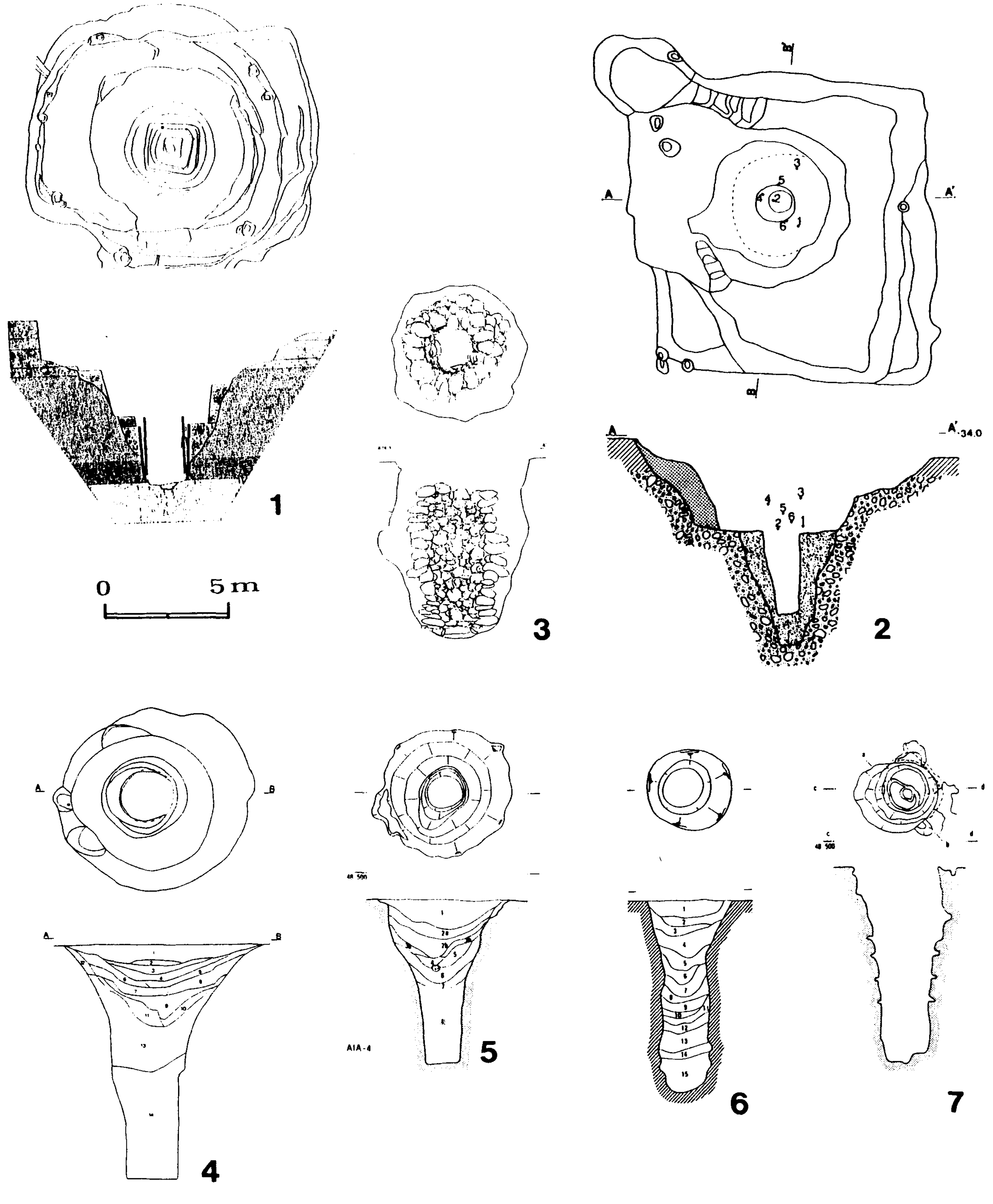
野川流域における井戸は、関東地方の一般的な集落と同様に、弥生・古墳時代に遡る例は知られておらず、如上の状況を反映して古代に至ってようやく確認されるようになる。武蔵国府関連遺跡は府中崖線沿いの立川段丘縁辺に広大な範囲に展開しており、市街地の再開発に伴って発掘調査が精力的に行われている。従前の湧水地点を考慮した集落形成を克服しての段丘上の官衙の設置には、新たな施設としての井戸が必要とされたものと考えられる。

古代の井戸はM28地点(58)とN21地点(59)から検出されている。ともに大規模に擂鉢状に掘り窪めた底部の中央部をさらに竪掘りして井筒部を形成したものであり、形状の類似から漏斗状井戸と呼ばれている。M28地点の井戸は上径11mで深さ5m、N21地点の井戸は上径12mで深さ5.5mを測る。中途まで降りて水を汲む構造となっており、その規模と関連して個別の宅地に付随するものとは考えられない。

M28地点の井戸は道路跡に隣接して位置しており、国府の居住区に設置された共同井戸と考えられている。内部からの出土遺物により、9世紀末頃に埋め戻されたものと考えられている。またN21地点の井戸は出土遺物より7世紀末ないしは8世紀の初頭頃に掘削され、9世紀後半代に埋め戻されたものと考えられている。

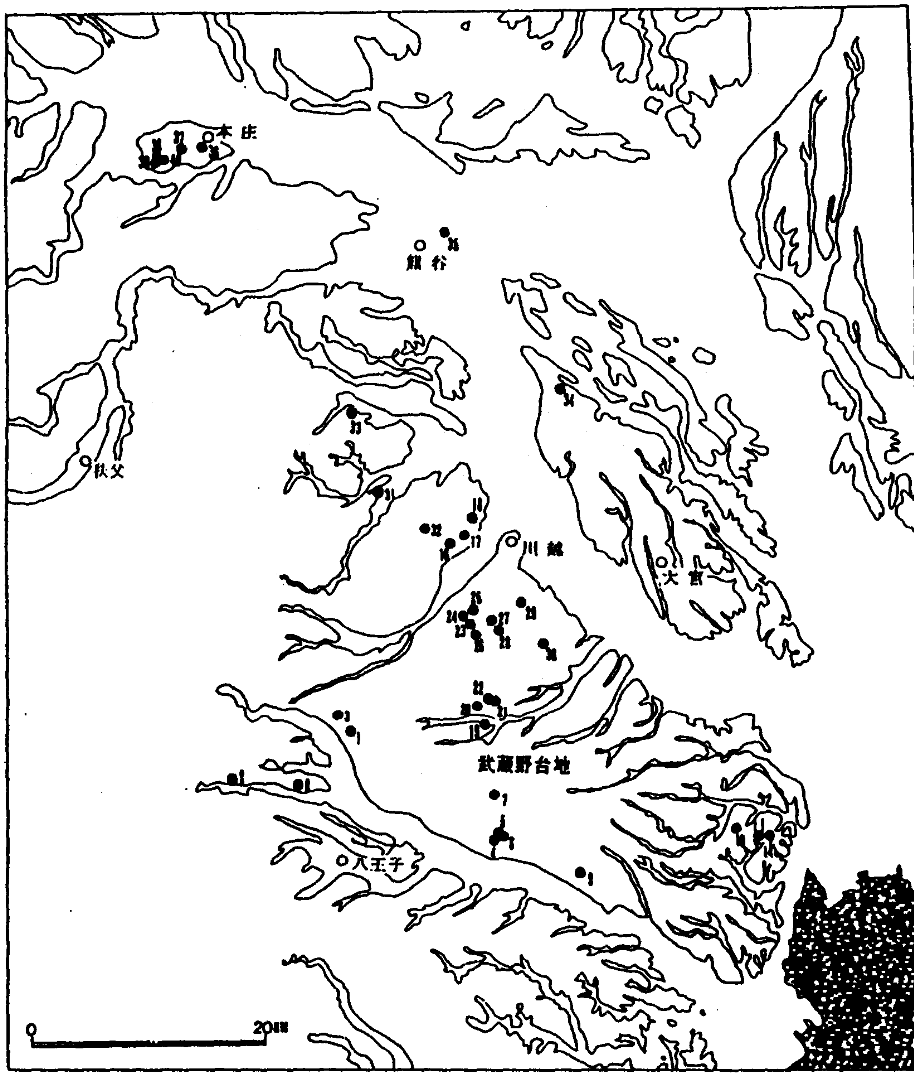
規模は異なるものの、同様の漏斗状井戸は調布市・下石原遺跡(60)からも検出されている。1辺6mの方形の掘方の中に2m下がって径80cmの井筒部を構築するものであり、上面からの深さは4mを測るものである。井戸の上部の覆土中から6点の「大」の墨書土器が検出されており、9世紀中頃の埋め戻しに際しての祭祀を物語るものと考えられている。

大規模な漏斗状井戸は、武蔵野台地に特有な構造の井戸として注目されてきた。鑿井技術が未発達な時代に、水利の悪い台地を大きく深く掘って



1 武蔵国府・M38地点、第1号井戸
2 調布市・下石原遺跡、第1号井戸
3 日野市・栄町、第1号井戸
4 世田谷区・祖師谷大道北遺跡、第1号井戸
5 三鷹市・島屋敷遺跡、第4号井戸
6 狛江市・下足立北遺跡、第1号井戸
7 三鷹市・島屋敷遺跡、第10号井戸

第22図 井戸集成



第23図　漏斗状井戸の分布

水を求めたものであり、武蔵野台地を中心として周辺地区を含めて40例以上が確認されている。江戸時代まで集落の共同井戸として使用された例も認められるものの、多くは早く機能を停止している[61]。

当該地区にあっては、この官衙施設に関連する大規模な漏斗状井戸を除くと、古代にあっても農耕集落における井戸は検出されていない。個別の宅地に付随する状態で井戸が検出されるようになるのは、中世以降である。

出土遺物から鎌倉時代の所産と考えられる井戸が検出されているのは、野川の支流である仙川沿いの世田谷区・祖師谷大道北遺跡である[62]。4基の井戸のうち2基が鎌倉時代後半、2基が室町・戦国時代のものと考えられている。いずれも素掘りで上端部が広がる構造である。掘立柱建物・溝・地下式壙などとともに検出されており、屋敷に付随する施設として掘削されたものである。

仙川上流域の三鷹市・島屋敷遺跡からは16基の素掘りの井戸が確認されている[63]。出土遺物から、これらのうちの2基が15世紀の所産と考えられており、掘立柱建物・溝・柵などの遺構と一体となって屋敷を構成している。ともに上端部が僅かに広がる構造であり、深さは3.2mと3.3mを測る。この遺跡の遺構・遺物の様相から、上層農民ないしは土豪的な在地勢力が居住者として想定さ

れている。残る14基の井戸は、江戸時代前期の陣屋にかかわる施設と理解されている。

野川下流域の狛江市・下足立北遺跡からは素掘りの3基の井戸が検出されている(64)。江戸時代初期以降の年代が想定されており、江戸時代初期の例は深さ2.5mで上端部が僅かに広がる構造を呈している。

当該地域において中世の屋敷地に掘削された井戸は、現在までのところ素掘りの構造であり、時期的な変遷としては上端部の広がりの縮小と把握されている(65)。石組の井戸は、日野市・栄町遺跡(66)から中世後半の所産例として2基が検出されている。中世の遺跡は未だ十分には調査されていない。遺跡の立地と水の関連という点からの検討も今後の課題であろう。

3）野川流域における神社

野川流域には多数の神社が存在しており、地域住民の信仰の状況を窺うことができるとともに、神社創建の年代をして地域開発の年代を推定することもある程度可能である。しかしながら、水神を祀る神社は意外なことに極めて少ない。

野川の水源の一つである国分寺市・真姿の池には真姿弁天を祀る社があり、水神信仰を窺うことができる。江戸時代の資料には平安時代の伝承を載せるものの、創建の年代は不詳である(67)。今に豊富な湧水量を誇り、湧水により形成された崖沿いの窪地に立地する小金井市・貫井神社は、「水の神である水神様を貫井弁財天と称え奉祀」したものである。天正18（1590）年の創建であり、祭神は市杵島姫命と大己貴命である。

深大寺に近い青渭神社も水神を祀った神社である。『新編武蔵風土記稿』には青波天神祠として「深大寺より東の方3町ばかりにあり、この字を池の谷と云、鎮座の年代を詳にせず、土人云往古社地に池ありしが、青波立ちて社前に至りしゆへかく號すと、此説は浮たることなり、又云これ式内にのする青渭の神社なりと、されど青渭神社は郡内澤井村にある社是なりと云ときは、當社は恐くは式内にはあらざるべし、青波の字青渭と相近きにより、かかる附会の説おこりしにや、社は僅なる社にして東向なり」と記載する。祭神は水波能賣大神と青沼押比賣命であり、創建年代は詳ではない。

谷を挟みこの青渭神社に対峙して台地の縁辺に小祠の池ノ上神社が鎮座している。詳細不詳であるが、名称よりすれば水神に関わるものであろう。

三鷹市・勝淵神社は仙川の源流に立地しており、名称自体が水に関わるものでありよく水神との関連を窺知することができる。中世の所産にかかる、至近の島屋敷遺跡との関連も窺われる神社である。『新編武蔵風土記稿』には「村の鎮守なり、勝淵の水神を祭るとも、又は柴田勝家の兜を納めてその霊を祀れりともいへり」と記載する。

また府中崖線沿いに立地する瀧神社は、武蔵府中に鎮座する大國魂神社の末社であり、5月5日の例祭神事に奉仕する諸役の人々及び神馬が、この瀧に身心を清めてから大祭が始められる禊の水と関連する神社であり、祭神は賀茂別雷命・玉依姫命・賀茂健角身命である。

これらが野川流域に認められる、水神との関連が窺われる主要な神社である。水神祭祀は、井戸とも関連するが、当該地の調査された資料では顕著ではない。

狛江市・下足立北遺跡の江戸初期の年代が想定される第1号井戸からは、応永2（1395）年の紀年銘を有する板碑が出土している。遺構の年代と大幅に異なる特殊な遺物の出土は、他の類例から推して祭祀的な意味が考慮されている。

このほかの神社では、小金井市・小金井神社は「武蔵国開拓の当時里人が菅原道真公の鴻徳を敬慕し社殿を奉祀」したものであり、元久2（1205）年の鎌倉時代の創建である。また調布市・八剣神社は「鎌倉幕府の家臣8名が建武年間当地

に移住して原野を開拓し、当村を開いたので、村民はその創業の功労を称賛して、8名の佩刀を神宝として祭ったのが当社の由来であり、祭神8名は鈴木藤四郎義春・鈴木源五郎義賢・鈴木平六郎義尚・鈴木秀太郎義澄・鈴木勘次郎義宜・大竹拾郎信昭・大竹新吾政親・大竹甚兵衛政康」である[68]。

また調布市・虎狛神社は、『新編武蔵風土記稿』に「是式内の虎柏神社なりという」として、武蔵国に44座、このうち多摩郡に8座ある「式内社」の一つとする考案を載せるが、あわせて「當郡根ケ布村に諏訪明神あり、社伝に式内虎柏神社なりという、いまだ何が是なることを知らず」としており、式内社の虎柏神社の所在は江戸時代の化政期の頃には明確ではなかったことが知られる。

以上の神社の創建年代を勘案すると、野川流域にあっては地域開発の一つの画期を中世に求めることも可能であり、この時期における井戸の普及と符合するところである。

Ⅳ. 野川の湧水と流域における遺跡

上述のように野川流域における湧水、水辺、井戸などと遺跡の分布の相関性について、旧石器（先土器）時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代、現代と、各時代別に分布状況、遺跡相相、出土品の特徴から検討してきた。

旧石器時代主要遺跡の分布は概して武蔵野面のハケ上に多く分布し、崖下の低位面には少ないが、縄文時代の主要遺跡は下位面の微高地（府中崖線）にも地形の制約を受けながら分布するようになる。弥生時代と古墳時代の遺跡は、野川上流域では極端に少なくなり、中・下流域と下位面に集中して分布するようになる。横穴墓の分布も崖の地形と地質の影響を受けて下流域に分布し、歴史時代の遺跡は少しずつ湧水や水辺の分布の規制が弱まり、井戸技術の発展とともに水辺背後の乏水地域にも出現するようになる。これに伴い、神社、仏閣、地主などの領有地には湧水や微高地が含まれるようになる。以上のように、湧水や水辺は、古代から現代に至るまで、時代の推移とともに影響の程度に変化があるものの、人類の生活や居住地の選定に大きなインパクトを与えてきた。

しかし近年、地下水・湧水は、量的には減少、または枯渇し、質的には病原性大腸菌や有機塩素系化合物などで人為的に汚染され、人類の健康維持のための環境構成要素としての役割が消失されつつある。

おわりに

本稿は、立正大学人文科学研究所の平成8年度、9年度の研究費により実施したものであるが、過去の他の研究課題で調査した資料により比較検討することができた。調査成果を多く得ていながら、筆者らの充分なる解析、検討が出来ず、次なる機会に報告せざるを得ないところも少なくない。

最後に、調査にあたり、立正大学文学部教授坂詰秀一氏、立正大学文学部地理学教室小玉浩助手、同大学院生稲村明彦氏、日本文理大学河野忠氏、立正大学文学部非常勤講師福田健司氏に大変ご協力、ご指導をいただいた。ここで感謝申しあげる次第である。

註

（1）矢嶋仁吉　武蔵野の集落　古今書院　昭和29年
（2）細野義純　武蔵野の地形と地下水　多摩川'83　㈶とうきゅう環境浄化財団　昭和58年
（3）高村弘毅　「野川流域の湧水について」『多摩川誌』　㈶河川環境管理財団　昭和61年
（4）高村弘毅　多摩川における湧水涵養機構に関する研究　－野川の場合－　㈶とうきゅう環境浄化財団研究助成、No.79　昭和60年
（5）高村弘毅　国分寺崖線の湧水の水収支について－数値解析編－　立正大学人文科学研究所年報No.30，34－52．平成5年

(6) 高村弘毅　都市の水循環の再生　建設月報No.539, 30－32. 平成6年　東京都環境保全局水質保全部水質規制課　東京都地下水保全ガイドライン（共著）1－56. 平成6年
(7) 高村弘毅　都市の水辺環境を回復するための予測解析－東京都野川流域における雨水浸透ますの適性配置を例として－立正大学大学院紀要No.12, 1－56. 平成8年
(8) 高村弘毅　都市の雨水浸透施設による地下水涵養　地下水学会誌Vol.38, No.4, 349－357. 平成8年
(9) 高村弘毅　地下水の汚染防止と対策　雨水技術資料No.22, 39－47. 平成8年
(10) 高村弘毅　水と環境－－人一人の自覚と国際協力で緑の地球を守る－　'97東測協28－31. 平成9年
(11) 高村弘毅　都市における被覆率と湧水湧出量の相関性に関する研究（共著）－首都圏における都市化と水収支・水文環境の変化の地理情報システムによる分析－　平成6年～8年度科学研究費補助金（基盤研究（B）－（2））研究成果報告書　53－65. 平成9年
(12) 坂詰秀一「原始・古代」『多摩川誌』財団法人・河川環境管理財団　昭和61年
(13) 武蔵野文化協会『武蔵野』第72巻第1・2号（特集・水と武蔵野）　平成6年
(14) 馬場悠男ほか『旧石器時代の考古学』学生社　平成10年
(15) 安蒜政雄編『日本人類文化の起源』昭和63年
(16) 赤澤　威ほか『日本の旧石器』昭和55年
(17) 都立府中病院内遺跡調査会『武蔵台遺跡Ⅰ』昭和59年
(18) 東京天文台構内遺跡調査会『東京天文台遺跡』昭和58年
(19) 舘野　孝「多摩ニュータウンNo.471-B遺跡の調査概要」『月刊文化財』第291号　昭和62年
(20) 舘野　孝「関東地方における前期尖頭器文化の石器群」『石器文化研究』第1号　平成元年
(21) 杉原荘介『群馬県岩宿発見の石器文化』昭和31年
(22) 小田静夫「世界最古の磨製石斧」『考古学の世界』2　ぎょうせい　平成5年
(23) 白石浩之「旧石器時代の石斧」『考古学雑誌』第75巻第3号　平成2年
(24) 高杉尚宏「野川下流域の先土器時代遺跡」『武蔵野』第63巻第2号　昭和60年
(25) 舘野　孝「大型獣の狩人たち」『考古学の世界』2　ぎょうせい　平成5年
(26) 粟島義明「先土器時代遺跡の構造的研究序説」『土曜考古』第11号　昭和61年
(27) 江坂輝彌「武蔵野台地の中期縄文式文化期湧泉周囲の聚落について」『人類学雑誌』第59巻第1号　昭和9年
(28) 広瀬昭弘ほか「縄文時代集落の研究～野川流域の中期を中心として～」『東京考古』第3号　昭和60年
(29) 恋ケ窪遺跡調査会『恋ケ窪遺跡Ⅰ』昭和54年
(30) 小金井市教育委員会『貫井』昭和53年
(31) 小金井市教育委員会『貫井南遺跡』昭和55年
(32) 小金井市教育委員会『中山谷』昭和46年
(33) 世田谷区教育委員会『堂ケ谷遺跡』昭和57年
(34) 三鷹市教育委員会『三鷹市第五中学校遺跡』昭和58年
(35) 宮崎　博「土地と縄文人」『物質文化』第47号　昭和61年
(36) 宮崎　博「縄文時代人の領域～多摩川左岸の遺跡群を中心に～」『考古学ジャーナル』第286号　昭和63年
(37) 三宅敦気「矢瀬遺跡」『水辺の考古学』日本考古学協会三重県実行委員会　平成8年
(38) 吉川國男「トチのアク抜き」『考古学の世界』2　ぎょうせい　平成5年
金箱文夫「水の確保と利用」『季刊考古学』第64号　平成10年
(39) 武蔵野公園泥炭層遺跡調査会『武蔵野公園低湿地遺跡』昭和59年
(40) 十時俊作「調布市内の古墳」『多摩地区所在古墳確認調査報告書』平成7年
(41) 多摩地区所在古墳確認調査団『多摩地区所在古墳確認調査報告書』平成7年
(42) 世田谷区教育委員会『嘉留多遺跡・砧中学校7号墳』昭和57年
(43) 大田区郷土博物館編『武蔵国造の乱』平成7年
(44) 大場磐雄ほか「北多摩南部地区における考古学上の調査」『東京都文化財調査報告書』15　昭和40年
(45) 池上　悟「南武蔵・多摩川流域における横穴式石室の導入と展開」『物質文化』第39号　昭和57年
(46) 池上　悟「南武蔵における後期古墳出土の鉄鏃について」『多知波奈考古』第2号　平成9年
(47) 池上　悟「東国横穴墓の型式と伝播」『おおいた考古』第4集　平成3年
(48) 池上　悟「東国横穴墓の一様相」『東国の横穴式石室と横穴墓』甎全舎　平成3年
(49) 日本考古学協会三重県実行委員会『水辺の祭祀』平成8年
(50) 紀野自由「下布田遺跡No.36地点発掘調査概報」『東京都調布市埋蔵文化財年報』平成7年度

(51) 調布市史編集委員会『調布市史・上巻』平成2年
(52) 石井則孝・竹花宏之「東京・多摩ニュータウンNo.107遺跡」『木簡研究』第12号　平成2年
(53) 菊地康明編『律令祭祀論考』塙書房　平成3年
(54) 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻第5号　昭和57年
(55) 群馬県教育委員会『三ツ寺Ⅰ遺跡』昭和63年
(56) 池上曽根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会『弥生の環濠都市と巨大神殿』平成8年
(57) 君津郡市考古資料刊行会『郡遺跡群発掘調査報告書』平成8年
(58) 府中市教育委員会『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅱ』昭和55年
(59) 府中市教育委員会『武蔵国府』平成3年
(60) 生田周治「調布市下石原遺跡で発見された古代の井戸について」『東京考古』第6号　昭和63年
(61) 吉川國男「漏斗状井戸とほりかねの井」『武蔵野』第72巻第1・2号　平成6年
(62) 世田谷区教育委員会『祖師谷大道北遺跡Ⅰ』平成7年
(63) 三鷹市教育委員会『島屋敷遺跡』平成9年
(64) 狛江市下小足立北遺跡調査会『下小足立北遺跡発掘調査報告書』昭和59年
(65) 戸田哲也「井戸に関する分析」『下小足立北遺跡発掘調査報告書』昭和59年
(66) 日野市栄町遺跡調査会『日野市栄町遺跡』平成7年
(67) 大嶋一人「野川源流の村」『多摩のあゆみ』第61号　平成2年
(68) 調布市史編集委員会『調布市史・上巻』平成2年